高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２集

県史跡　鹿持雅澄邸跡

県史跡鹿持雅澄邸跡整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９２・３

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

県史跡　鹿持雅澄邸跡

県史跡鹿持雅澄邸跡整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

1992・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

整地層出土遺物（上２，下３）

整地層出土遺物（７）

整地層出土遺物（17）

整地層出土遺物（左19，右21）

序

本年は丁度鹿持雅澄の生誕二百年目に当たり，記念事業が鹿持雅澄先生誕生二百年記念事業実行委員会の手によって計画され，高知市によって県史跡鹿持雅澄邸跡の整備事業が実施されることになりました。

鹿持雅澄と言えば万葉集の研究で多大な功績を上げ，大著である「万葉集古義」を著し，国文学研究の一つの原点にたつものとして評価されています。このような業績と旧邸跡が比較的良好な形で残っていたことにより昭和38年７月５日に県史跡の指定を受けました。それ以後保存会や町内会の努力で各種の樹木が植えられ手入れされ今日に至っています。

今回の調査は，高知市が計画している同邸跡の整備事業に先立ち，(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知市の委託を受け，当該史跡の遺存状況を確認する目的で実施したものです。その結果，当時のものと考えられる建物跡や土坑が確認され，多大な成果を上げることができました。

本書が近世の建物研究並びに広く文化財研究の一助になれば幸甚の至りです。

最後に，調査に際し何かとご協力いただいた関係者及び地域住民の方々に心より厚くお礼を申し上げます。

1992年３月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所　長　　小橋　一民

例　　言

1．本報告書は，県史跡鹿持雅澄邸跡整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書で，高知県高知市福井町1226-2に所在する県史跡鹿持雅澄邸跡の発掘調査報告を収録した。

2．発掘調査は，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知市の委託を受け，高知県教育委員会の指導を得て実施した。

3．発掘調査及び整理作業は，(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員廣田佳久が担当し，同センター調査員近森泰子の補助を得た。調査の事務，総括は同センター事業課長山崎浩，同センター主事三浦康寛が行った。

4．本書の執筆，写真撮影，編集等は廣田佳久が行った。調査の際には岡本健児氏（高知市文化財保護審議会委員）の助言を得た。

5．遺構については，ＳＢ（掘立柱建物跡），ＳＫ（土坑），Ｐ（ピット）で標示し，遺構ごとの通し番号である。

6．遺物については，縮尺⅓で実測図を載せた。番号は通し番号で，実測図の番号と図版の番号は一致している。

7．発掘区の設定並びに遺構の測量にあたっては，任意座標で行い，方向点を西側路肩に埋設している。標高は海抜高を示す。

8．遺構の縮尺率は，ＳＢが1/120，ＳＫが1/60で掲載し，方位（Ｎ）は極北である。

9．調査にあたっては，高知県教育委員会，鹿持雅澄先生生誕二百年記念事業実行委員会，町内会の方々の協力を得た。整理作業では，建物跡等遺構について文化庁建造物課主任文化財調査官宮本長二郎氏，近世陶磁器類等遺物について佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長大橋康二氏に多大な助言を得た。記して深く感謝する次第である。

10．出土遺物は「91-３ＫＭ」と注記し，(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターにおいて保管している。

報 告 書 要 約

1．遺 跡 名	県史跡 鹿持雅澄邸跡	遺跡番号 010155　遺跡地図No.20-48
2．所 在 地	高知市福井町1226-2	
3．立　　地	高知市北西部低丘陵中腹　標高約９ｍ	
4．種　　類	江戸時代（屋敷跡）	
5．調査主体	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター	
6．調査契機	史跡整備事業	
7．調査期間	平成３年４月22日～５月22日	
8．調査面積	227㎡	
9．検出遺構	〔江戸時代〕 ＳＢ２棟，ＳＫ４基（内２基が便所跡），Ｐ４個	
10．出土遺物	肥前系陶磁器，瀬戸・美濃系陶器，関西系陶器，能茶山焼陶磁器，備前焼，産地不明近世陶磁器	
11．内容要約	鹿持雅澄は万葉集の研究で著名な学者で，『万葉集古義』を著している。今回の調査では19世紀前半以降の建物跡などを確認することができた。時期的にみて鹿持雅澄の屋敷跡であったものとみられる。また，屋敷跡はこの時期としては類例の少ない掘立柱建物であり近世民家を研究する上での貴重な資料となっている。	

目　　次

第Ⅰ章　調査の契機と経過 …… 1
1．契機と経過 …… 1
2．調査日誌抄 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の地理的，歴史的環境 …… 2
1．地理的環境 …… 2
2．歴史的環境 …… 2

第Ⅲ章　調査の概要 …… 5
1．調査の方法 …… 5
2．調査の概要 …… 6

第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 11
1．掘立柱建物跡 …… 11
2．土坑 …… 13
3．その他の遺構及び井戸 …… 14

第Ⅴ章　考察 …… 16

付録「鹿持雅澄旧邸の聞き書」　橋詰延寿 …… 24

挿　　図

Fig. 1　高知市位置図 …… 2
Fig. 2　調査地点と周辺の遺跡分布図 …… 3
Fig. 3　県史跡鹿持雅澄邸跡周辺の地形図 …… 5
Fig. 4　発掘区設定図 …… 6
Fig. 5　調査区セクション図 …… 7
Fig. 6　遺構平面図 …… 10
Fig. 7　ＳＢ－１ …… 11
Fig. 8　ＳＢ－２ …… 12
Fig. 9　ＳＫ－１ …… 13
Fig. 10　ＳＫ－２ …… 13
Fig. 11　ＳＫ－４ …… 14
Fig. 12　井戸 …… 15
Fig. 13　遺物実測図１ …… 19
Fig. 14　遺物実測図２ …… 20
Fig. 15　鹿持雅澄先生旧邸間書図 …… 21

表

Tab. 1　調査地点と周辺の遺跡分布表 …… 3

図　　版

巻頭図版１　整地層出土遺物（上２，下３）
　　整地層出土遺物（７）
巻頭図版２　整地層出土遺物（17）
　　整地層出土遺物（左19，右21）
ＰＬ．１　調査前全景（南より）
　　調査前全景（東より）
ＰＬ．２　遺構検出状態（東より）
　　遺構検出状態（東より）
ＰＬ．３　遺構検出状態（東より）
　　遺構検出状態（西より）
ＰＬ．４　遺構完掘状態（東より）
　　遺構完掘状態（西より）
ＰＬ．５　ＳＢ－１・２，ＳＫ－３（東より）
　　ＳＢ－１・２，ＳＫ－３（東より）
ＰＬ．６　第Ⅰ層セクション（東より）
　　サブトレンチセクション（南より）
ＰＬ．７　ＳＢ－１　Ｐ－９検出状態（南より）
　　ＳＢ－１　Ｐ－９完掘状態（南より）
ＰＬ．８　ＳＫ－１（南より）
　　ＳＫ－１（南より）
ＰＬ．９　ＳＫ－２（南より）
　　ＳＫ－４（東より）
ＰＬ．10　井戸（南より）
　　井戸（北より）
ＰＬ．11　ＳＢ－１　Ｐ－１～８
ＰＬ．12　ＳＢ－１　Ｐ－９～16
ＰＬ．13　出土遺物１
ＰＬ．14　出土遺物２
ＰＬ．15　出土遺物３
ＰＬ．16　出土遺物４

第Ⅰ章　調査の契機と経過

1．契機と経過

鹿持雅澄邸跡は高知市の北西部，福井町鹿持団地内に所在し，付近の山には雅澄の墓所もあり，昭和38年（1963年）７月５日に県史跡の指定を受けている。現在は，保存会の努力で雅澄に因んだ万葉の樹木が植えられ手入れされている。邸跡はほとんど旧態を留めないが，北西の隅には当時のものと伝えられる井戸が遺存する。なお，鹿持雅澄（1791～1858）は万葉集の研究で著名で，大著「万葉集古義」を著し，本年度が丁度生誕200年目に当たる。

この生誕200年を記念して，鹿持雅澄先生生誕二百年記念事業実行委員会の手で各種事業が計画される一方，高知市でも独自に同邸跡の整備事業を実施することとなった。この史跡整備事業に先立って，当該史跡の遺存状況を確認する目的で，高知県教育委員会の指導のもと，本年度設立した財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知市の委託を受け発掘調査を実施することとなった。

調査は，樹木の伐採後に取り掛り，平成３年４月22日から５月22日までの実働15日を費やして実施された。

2．調査日誌抄

1991年４月22日～５月22日

４・22　本日から発掘調査を開始する。調査区の設定，写真撮影（発掘調査前全景）等を行う。

４・23　発掘区北側から東西に並んだ柱穴群を検出する。また，水準測量を行う。

４・24　雨天のため現場作業は中止。

４・25　建物跡を検出したため，規模確認のために発掘区の拡張作業を行う。合わせて平板で地形測量も行う。

４・26　昨日に引きつづき拡張作業を行う。遺構が検出された部分については杭打ちを行う。

４・30　発掘区を西側に拡張する。東西５間，南北３間以上の建物であることが判明する。

５・１　発掘区をさらに西側へ可能な限り拡張する。合わせて西壁の土層の堆積状態を実測する。遺構検出状態の写真撮影を行う。

５・７～８　雨天のため現場作業は中止。

５・９　本日から遺構の調査を行う。柱穴の中には柱根が残っているものもあった。検出面が整地層のためか不明瞭で，幅約30cmのサブトレンチを格子目状に設定する。

５・10　遺構の調査と平行して，サブトレンチの調査を行う。約20cmで岩盤に至る。この岩盤を掘り込んだ土坑２基（便所跡）を確認する。横山龍雄高知市長が現地視察に来られる。

５・13　建物がさらに南側へ延びているため発掘区を南側に可能な限り拡張する。

５・14　遺構の調査を行う。土坑の底面から新たに柱穴を確認する。

５・15　雨天のため現場作業は中止。

５・16　新聞発表を行う。終了後，平面実測を行う。

５・17　平面実測並びに水準測量を行う。

５・18　現地説明会を開催する。約80名が参加する。

５・20～22　埋め戻し作業を行い，すべての調査を終了する。

第Ⅱ章　遺跡の地理的，歴史的環境

1．地理的環境

高知市は，高知県の中央部に位置し，県庁所在地であることから産業，商業，文化の中心地となっている。東を南国市，北を土佐山村と鏡村，西を伊野町と春野町の1市2町2村と境を接する。面積143.23㎢，人口約31万4千人を有し，高知県全人口の約37％が集中する。国の重要文化財に指定されている高知城，月の名所桂浜，はりまや橋等の観光資源にも恵まれ，高知県の中心的地位を確固たるものにしている。

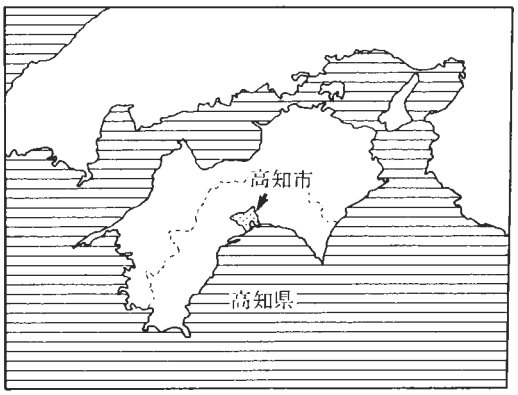


Fig. 1　高知市位置図

立地をみると，市街の北部から西部にかけては標高400～600ｍの山地が連なり，東部は香長平野に接し，南部は土佐湾に面し，その入江である浦戸湾が深く入り込み，天然の良港となっている。この浦戸湾には高知市を東西に貫流する鏡川，南国市北部及び香美郡に源を発し，土佐国府跡，土佐国分寺跡，岡豊城跡に沿って西流する国分川，そして舟入川，江ノ口川，下田川が注ぎこんでいる。中世頃まで現在の平野部の大半は内海であり，遺跡の立地は山裾部にほぼ限られていたが，鏡川など河川の堆積や隆起，そして近世になって山内一豊が大高坂山に居城を構えたことにより干拓による埋立などが活発に行われるようになり，ほぼ現在の状態となった。

高知の名は，山内一豊が大高坂山を河中山と改名したことに端を発し，度重なる水害でこの字を忌み，そして，五台山竹林寺の文殊菩薩の高い知恵にちなんで高智山と改め，その後高知という字を当て嵌めるようになったものといわれる。(1)

今回報告する県史跡鹿持雅澄邸跡は，高知市北西部の低丘陵中復に位置する19世紀代の遺跡である。その立地からすると自然地形をそのまま利用したのではなく，人の手を加えて宅地化したことが窺え，当時も周辺部にはこのような宅地があったものと思料される。

2．歴史的環境

高知市は近世以降高知県の中心地として繁栄して来たが，前述のとおり中世頃までは内海が現市内の平野部の大半を占めていたため，それ以前の遺跡については周辺の山裾部に集中する傾向がみられる。一方では，市内の平野部は堆積が厚いため市街地化が進んでも遺跡の発見さ

れる機会が少なかったともいえる。

現在の所，縄文時代以前の遺跡は少なく，特に旧石器時代に関してみれば，チャート製の細石刻１点が高知市東部の高間原古墳群の１号古墳[(2)]から発見されているのみである。縄文時代に関しても遺構が検出されたものはなく，土器片や石器が発見された程度で，長浜チドリ遺跡，正蓮寺遺跡などが挙げられる。弥生時代では前期末の土器が出土した柳田遺跡が現在最も古く，鏡川と神田川に挟まれた自然堤防上に集落が営まれていたものと考えられている。中期から後期にかけては朝倉城山遺跡などの高地性集落遺跡が発見されている。他に福井のかろーと口遺跡，大津の高天原遺跡などがある。これらは山裾部から山頂部にかけて立地する遺跡である。

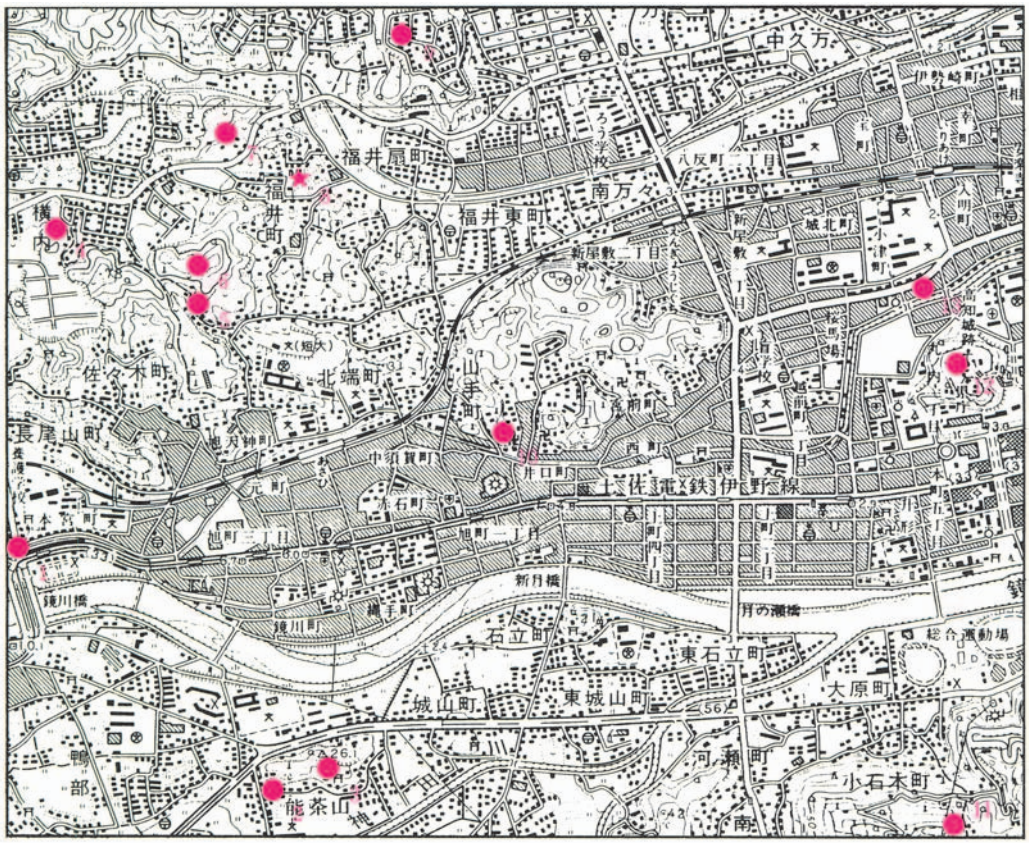


Fig. 2　調査地点と周辺の遺跡分布図（S＝１：25,000）

Tab. 1　調査地点と周辺の遺跡分布表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	杓田遺跡	古墳	6	かろーと口遺跡	弥生	11	小石木町遺跡	弥生
2	鴨部遺跡	弥生	7	福井古墳	古墳	12	高知城跡	江戸
3	能茶山窯跡	江戸末	8	**鹿持雅澄邸跡**	**江戸末**	13	尾戸遺跡	江戸
4	横内遺跡	弥生	9	嘉武保守城跡	戦国			
5	学園裏遺跡	弥生	10	井口城跡	〃			

一方，平野部に立地する遺跡が介良本村から中野団地にかけての広範囲で発見されている。表採された遺物をみると，古墳時代にまで及ぶものと考えられ，南国市乱戸遺跡さらには郷ノ前遺跡まで繋がる大規模な遺跡群になる可能性を秘めている。次に古墳時代をみてみると，まず，古墳では東部の高天原山に県下有数の高間原古墳群，北部の愛宕山，秦泉寺には秦泉寺古墳群，西部から南西部にかけては塚の原古墳群，朝倉古墳，坂本古墳，小石木山古墳などが確認されている。これらはすべて後期古墳に属するもので，前期のものは確認されていない。この状況は県下最多の古墳が所在する香長平野一帯でも看取されるところである。集落遺跡の確認は今まで皆無に近い状態であったが，本年度実施された遺跡分布調査(3)で前述の介良地区と加賀野井地区等で当該時期の遺物が表採されており，近い将来確認されるものと思われる。古代，高知市は長岡・土佐・吾川郡の三郡にわたり，長岡郡の気良(けら)郷，大角(おおつ)郷，土佐郡の土佐(とさ)郷，神戸(かんべ)郷，高坂(たかさか)郷，鴨部(かもべ)郷，朝倉(あさくら)郷，吾川郡の仲村(なかむら)郷が存在したことが「和名抄」に記載されている。この時代では白鳳期の瓦が出土する秦泉寺廃寺が著名であり，同系統の瓦(4)が出土した吾川郡春野町大寺廃寺との繋がりも注目されている。中世以降では比較的遺存状況が良く，発見されやすい城跡が数的には多くなっているが，一宮神社周辺ではこの時期の土師質土器片も多数表採されており，集落遺跡も少なからず発見されつつある。近世になれば，高知城の築城が行われ，県下の中心地として発展を遂げ，城下を始めとして市内一円が遺跡の範疇で捉え得るものであるが，現在遺跡として保護の対象となっているものは家老級の屋敷跡や窯跡（能茶山焼等）などに限定されている。今回報告する遺跡は著名な人物の屋敷跡として県史跡となり保護されて来たもので，能茶山焼と称される陶磁器も肥前系陶磁器に混ざって出土している。

以上高知市の遺跡について概観したが未知数部分が多く，今後予定されている大規模開発によって新たな展示をなすものと思料される。

註

(1) 山内一豊は居城を構えていた大高坂山が江ノ口川と鏡川に挟まれていたため河中山と改めた。

(2) 径約６ｍの円墳で，標高約80ｍを測る。鉄鏃，鉄刀などの副葬品に混じって玄室床面より出土した。

(3) 昭和61年度から10ヵ年計画で実施されている高知県遺跡詳細分布調査の一環として本年度高知市が実施したもので，その成果は『高知県遺跡地図－土佐・吾川ブロック－』の中に掲載されている。

(4) 秦泉寺廃寺出土の有稜線素弁八葉蓮華文鐙瓦の退化型式のものが大寺廃寺から出土する。

参考文献

『高知県の地名』平凡社　1983

『全国遺跡地図　高知県』　文化庁記念物課　昭和51年

『日本の古代遺跡　高知』　岡本健児編著　保育社　平成元年

『高知県史　考古編』　岡本健児　高知県　昭和43年

第Ⅲ章　調査の概要

1．調査の方法

調査対象地は，市有地で県史跡として公園となっており桜を始めとする多くの樹木が植えられていた。これら樹木の内，遺構が存在する可能性の低い縁辺部の樹木については残し，他は伐採した。また，調査対象地は，住宅団地（鹿持団地）の一角にあり，面積も約600㎡と狭いものであった。そのため，調査の基準軸は対象地の北辺に直交するラインをＸ軸，それに直交するラインをＹ軸とする任意座標を設定した。また，方向点２点（ＴＰ－１とＴＰ－２）を隣接する市道路肩に埋設した。なお，グリッド北は磁北に対し東へ６°48′50″（ＧＭ角），真北に対し東へ０°48′50″（真北方向角）それぞれ振っている。

調査は，まず発掘区をこの基準軸に沿って北端（幅12ｍ）から南へ14ｍの部分に設定して行った。その結果，建物跡の柱穴が確認されたため，発掘区を可能な限り拡張した。最終的な発掘調査面積は227㎡であった。

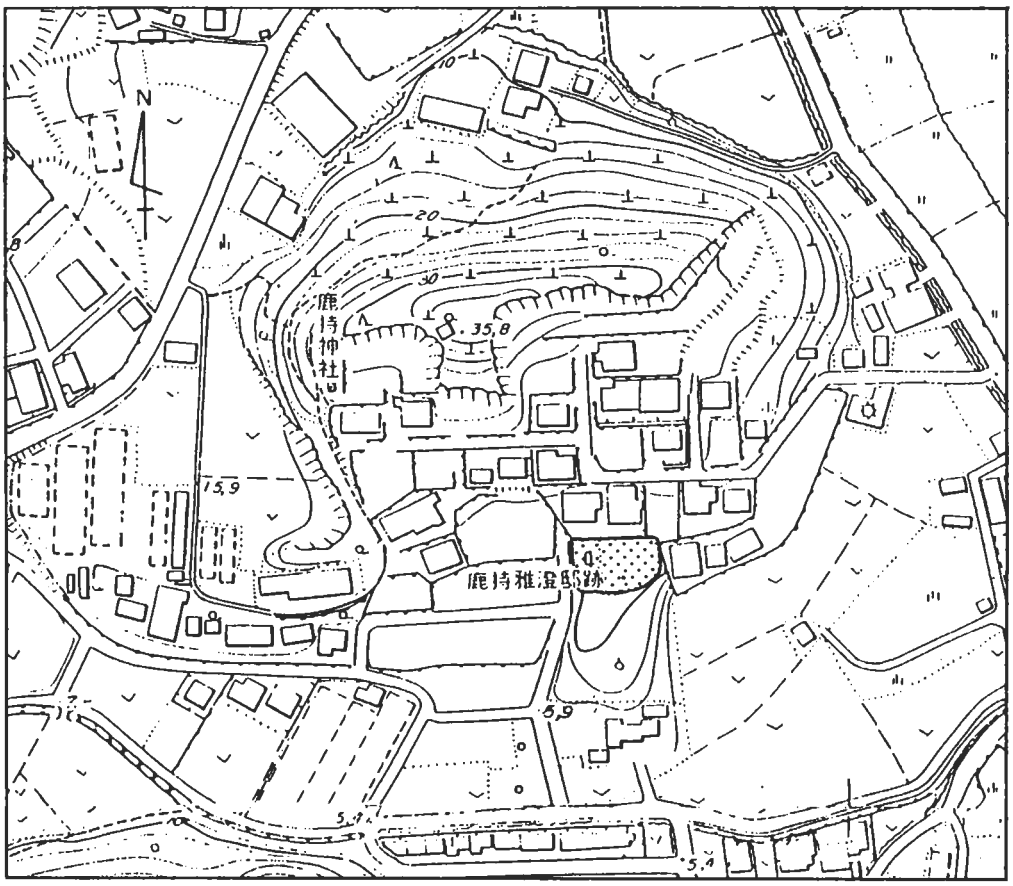


Fig. 3　県史跡鹿持雅澄邸跡周辺の地形図（Ｓ＝１：5,000）

2．調査の概要

調査区は，北から南に向かって1°21′Sの傾斜度で傾斜しており，遺構検出面でもほぼ同じ方向に若干の傾斜（傾斜度0°54′S）が認められた。これは，当該地が公園であると共に団地内の通路としても使用されていたため通路部分となった南側の表土が削られると共に雨水がこれを伝わって北側から南側へ流れ，表土を少しずつ押し流されたためと考えられる。著しい所では検出面が一部掘り込まれていたところもあった。しかし，当該邸が明治年間に取り壊されて以後新たな建物が建築されず，畑地として利用され，後に県史跡となり今日に至ったために地表下に掘り込まれた遺構については全般に比較的良好な状況で検出することができた。

調査の結果，整地層に掘り込まれた掘立柱建物跡2棟，土坑4基，ピット4個を検出することができた。ただし，礎石建物を復元し得るような礎石は確認できなかった。以下，層序，堆積層出土遺物について記すことにする。

(1) 層序

調査区において認められた基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　整地層

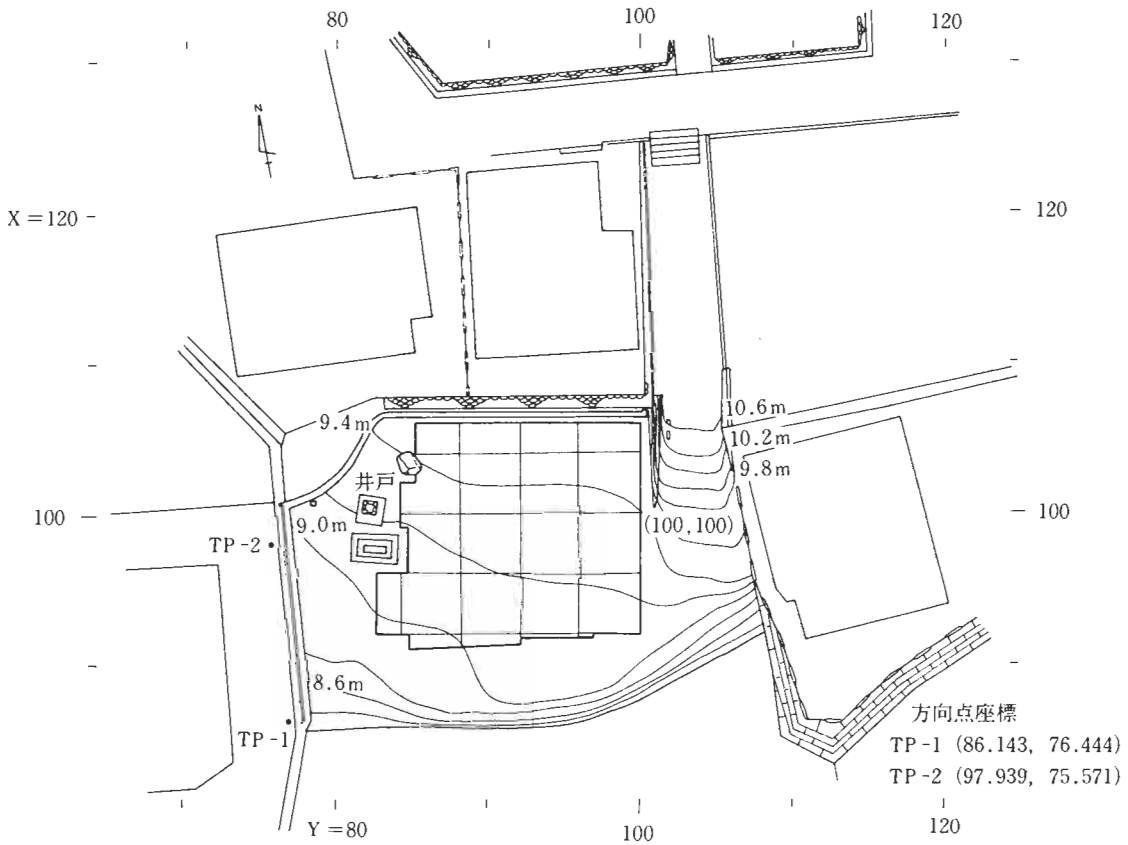


Fig. 4　発掘区設定図（S＝1：500）

第Ⅲ層　黄褐色土（地山）

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅱ層上面であった。

第Ⅰ層，表土層の厚さは０～45cmを測り，北側では礫混赤褐色粘質土，礫混灰黄色粘質土等の客土が多く認められ，人の手が多分に加えられたことを伺うことができる。さらに，層位中には石灰石の破片や現在のスレート瓦片等が認められ，周囲の宅地造成の影響を少なからず受けていることがわかる。また，前述の通り当該地が通路となっていたため，表土層は抉られ，第Ⅱ層が露出している箇所もみうけられた。

第Ⅱ層は整地層で，数層に分層される。基本的にはすべて礫混じりの粘質土で，黄褐色から暗褐色，一部黒褐色を呈す。厚さは平均すると20cm前後で，北側が薄く，南側が厚い。特に，南西部は旧地形が谷部になっていたとみられ，厚さ70cmを測る箇所もみうけられた。遺物はこの部分の赤色粘質土のブロックを含む礫混暗褐色粘質土（Ⅱ－５）中に多く含まれていた。多分，深くなっていた部分に投棄されたものであろう。

第Ⅲ層は地山で概ね黄褐色の岩盤となっており，北側から南側へ向って傾斜している。表面はいく分起伏がみられ，南西部で急に谷状の落ち込みとなる。

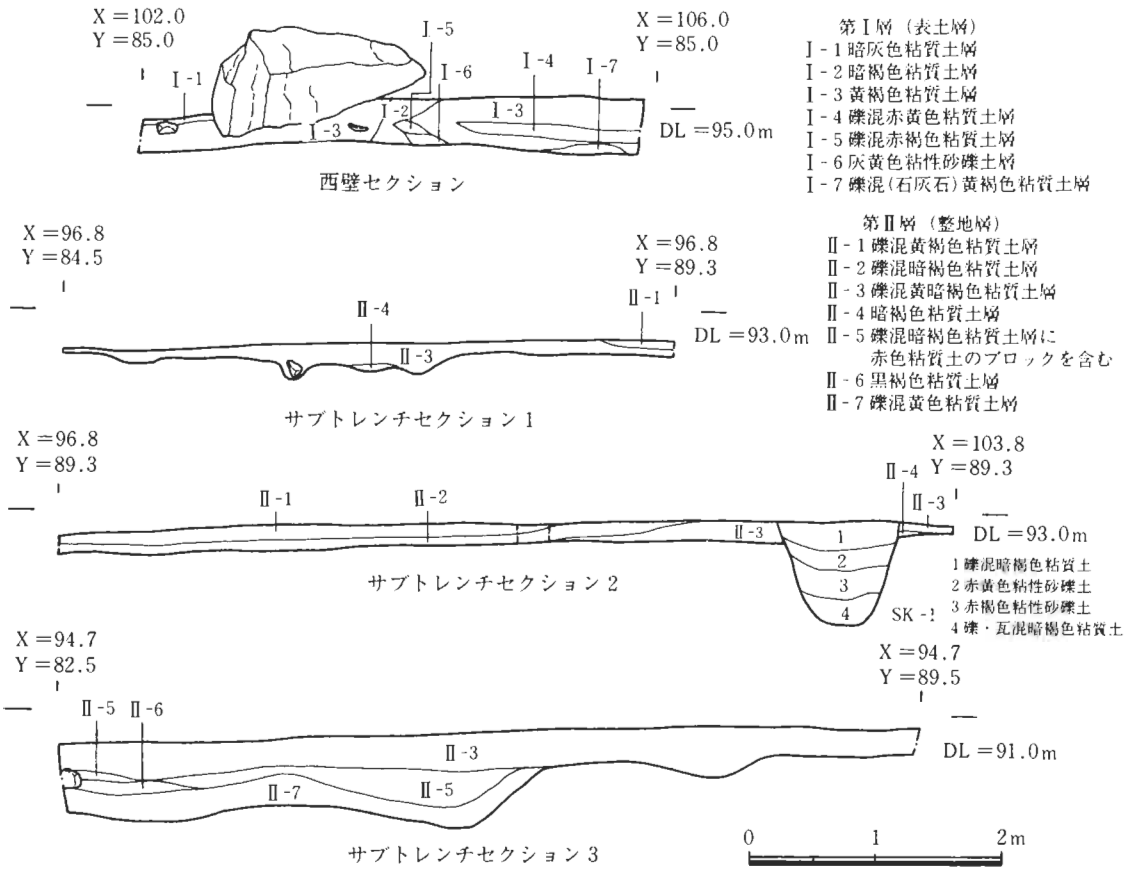


Fig. 5　調査区セクション図

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅰ層出土遺物（Fig. 13－1）

肥前系の磁器の皿で，型打ち成形である。口縁部は体部から内湾気味に上がり，端部を細く仕上げる。口唇部は口錆となり，赤褐色に発色する。底部は平らで，蛇ノ目高台となる。見込には文様がある。肥前系Ⅴ期のものとみられる。

第Ⅱ層出土遺物（Fig. 13・14－2～25）

今回復元できたのは，すべて第Ⅱ層－5から出土したものである。第Ⅱ層の他の部分からもこれらと同時期のものが出土しているが，細片ばかりで図示できるものはなかった。

2～12は肥前系の陶磁器である。2は蓋付碗の蓋で，3とセットとみられる。口縁部は短く内湾気味に真下を向く。天井部はやや丸味を有し，輪状のつまみが付く。外面には4条の界線と列点文及び花文，内面には2条の界線と連続文（四方襷文）が描かれる。3は蓋付碗の身で，口縁部は欠損する。体部は内湾気味に外上方へのびる。底部は平らで削り出し高台となる。外面には草花文と2条の界線に挟まれた列点文及び比較的幅広の界線，内面見込には2条の界線と文字が描かれる。2点ともⅤ期に属すとみられる。4は陶器の碗で，口縁部の一部のみが残存する。口縁部は斜め上方にのび，端部を細く仕上げる。外面の一部には回転ヘラ削り調整が施され，それより上方及び内面には褐色釉を施釉し，内面に刷毛目文を施す。18世紀頃のものとみられる。5は磁器の碗で，口縁部は体部から内湾気味に上がり，端部を細く仕上げる。外面には葦と蛇籠が描かれ，内面口縁部上端に1条の界線を施す。Ⅳ期の後半，18世紀後半のものとみられる。6も磁器の碗で，波佐見系統に属す。口縁部は内湾気味に上がり，端部は丸い。外面には1条の界線と円に斜めの線の文様を描き，内面には2条の界線を施す。18世紀後半に属する。7も磁器で，口縁部は欠損するが端反の碗とみられる。底部は平らで，削り出し高台となる。外面には区画南蛮人，内面見込には2条の界線とその内側に山月と湖面に浮ぶ舟を描く。Ⅴ期に属すとみられる。8・9は磁器の碗であるが質が悪い。双方とも体部は内湾気味に上がり，底部は平らで，しっかりした削り出し高台となる。内面と畳付は無釉で，他には灰色釉が施釉される。19世紀代のものと考えられる。10は磁器の蓋で，焼継の痕が残る。口縁部は内側に屈曲し，かえりとなる。天井部は平らであるが，中央部が欠損する。外面には梅花文が描かれる。かえり部分は無釉である。Ⅴ期の後半に属す。11はそば猪口で，口縁部は欠損するが，体部から斜め外上方へ真直ぐ上がるとみられる。底部は平らで，削り出し高台となる。体部外面には界線状の文様と1条の界線，高台外面には2条の界線，同内面には1条の界線がそれぞれ描かれる。18世紀後半のものとみられる。12は紅猪口で，口縁部は体部から内湾気味に上がり，端部は上方を向く平面をなす。また，体部から口縁部にかけて厚みを増す。底部は小さな削り出し高台となる。外面には放射線状の条線が施される。新相を呈する紅猪口で，Ⅴ期に属す。

13は唯一瀬戸・美濃系で，広東型の碗である。口縁部は内湾気味に上がり，端部は丸い。外

面には花文，内面には1条の界線が施される。19世紀前半のものとみられる。

14～16は関西系と呼称される陶器であるが，地元（能茶山焼）の可能性もある。14は碗で，口縁部は内湾気味に上がる。底部はしっかりした削り出し高台で，畳付は三面に面取りされる。見込には胎土目の痕がある。高台以外に淡オリーブ灰色の釉が施釉され，細かい貫入がはいる。18世紀頃のものとみられる。15・16は若干寸法が異なるがほぼ同型である。体部は内湾気味に上がり，口縁部で大きく外反させ，端部を細く仕上げる。底部は小さな削り出し高台で，畳付及び高台外面は面取りされる。高台以外に透明釉が施釉され，全面に貫入がはいる。18～19世紀前半のものと考えられる。

17～22は地元の能茶山焼とみられるものであり，高台内面に能茶山の窯印の施されたものもある。17は磁器で，広東茶碗である。体部は内湾して上がり，口縁部で外上方に真直ぐのび，端部を丸く仕上げる。底部は削り出し高台となり，内面に窯印が施される。外面には窓絵と3条の界線，内面には雷文そして見込には1条の界線と形不明の文様が描かれる。18もほぼ同型態の碗である。体部外面には形不明の文様と1条の界線，高台外面に3条の界線と同内面に窯印，見込には1条の界線と形不明の文様が描かれる。19は底部が欠損する。口縁部は外上方へほぼ真直ぐ上がり，端部は丸く仕上げる。外面には草花文，内面には2ヶ所に界線が施される。20は蓋で，口縁部は欠損する。天井部はやや丸味を有し，輪状のつまみが付く。外面には界線に挟まれて文字と文様，内面には3条の界線と形不明の文様がそれぞれ施される。21は広東茶碗の蓋である。口縁部は天井部から内湾気味に下り，端部は丸い。天井部外面には輪状のつまみが付く。外面には界線と花文，内面2ヶ所に界線がそれぞれ施される。また器面全面に貫入がみられる。22は皿で，口縁部は内湾して短く上がる。底部は低い削り出し高台となる。内面及び見込に文字と山水画が描かれる。畳付は無釉である。

23～25は産地不明の陶器であるが，地元（能茶山焼）で焼かれた可能性もある。23は天目茶碗で，口縁部は体部から屈曲してほぼ真上に上がり，端部を丸く仕上げる。器面には指頭圧痕が残る。内外面とも鉄釉を施釉する。24は溝縁皿である。口縁部は短く内湾して上がり，端部は上方を向き，そこに凹線が巡る。底部は低い削り出し高台となる。畳付以外に鉄釉（サビ釉）を施釉する。25は徳利で，口頸部は欠損する。肩部は斜め下方へ下り，途中で段をなす。上胴部から底部にかけてほぼ真直ぐ下り，平らな底部に至る。底部外面は回転ヘラ削りで，外端部を面取りする。外面に鉄釉を施釉する。その際，内面にも鉄釉が垂れる。

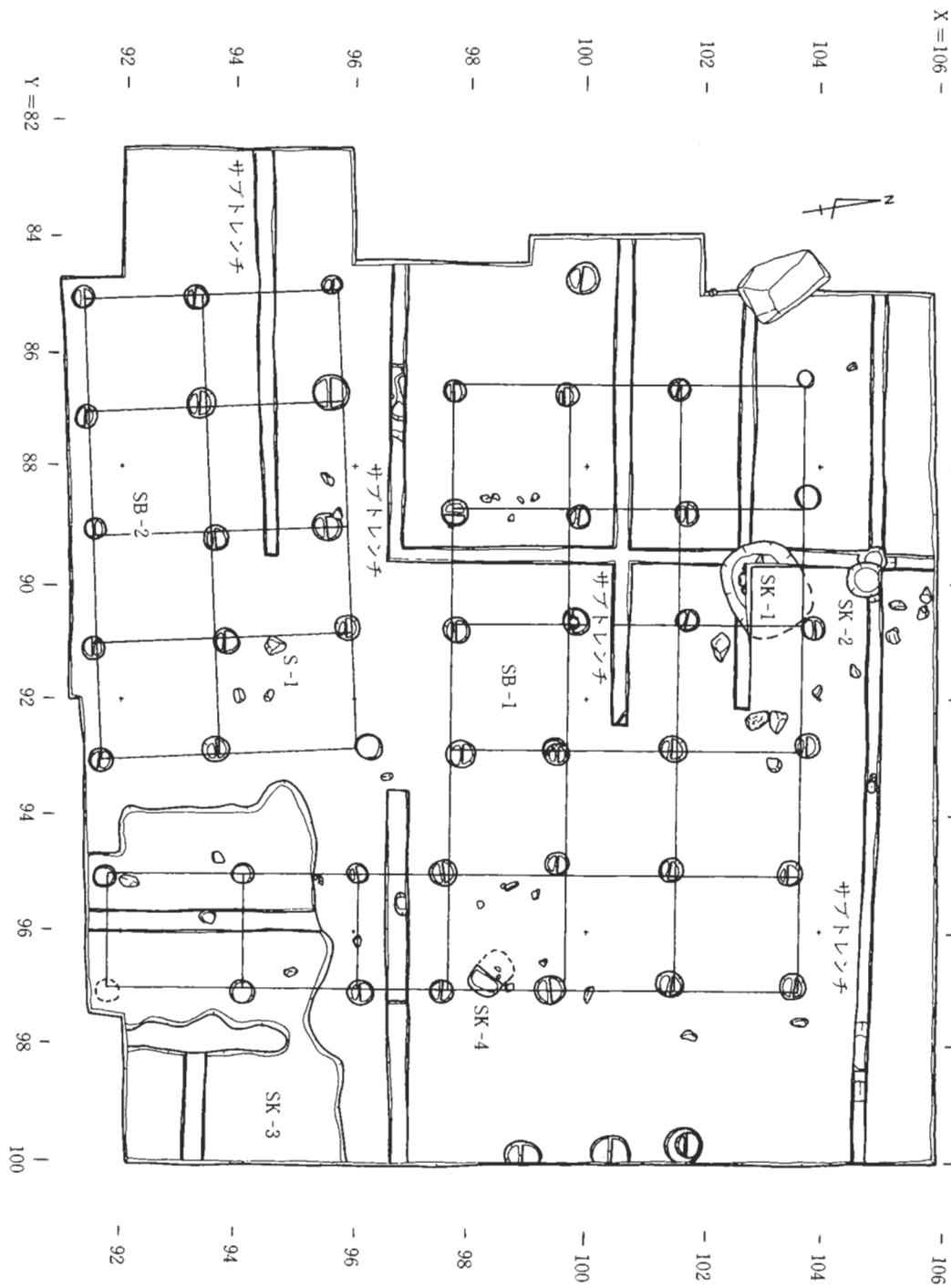


Fig. 6　遺構平面図（S＝1：120）

第Ⅳ章　遺構と遺物

1．掘立柱建物跡

(1)　SB－1（Fig. 7）

SB－1は，調査区ほぼ中央部北寄りで検出した桁行5間（総長約10.3m，約34尺），梁間（総長約6.0m，約20尺）の東西棟掘立柱建物跡で，南側柱東端1間に1間（総長約1.95m，6.5尺）×3間（総長約5.7m，約19尺）の張り出しが付く，角屋造りである。張り出し南端の1間×1間分の柱穴はSK－3の底面で検出し，南東端の柱穴は木の根で壊されており，検出できな

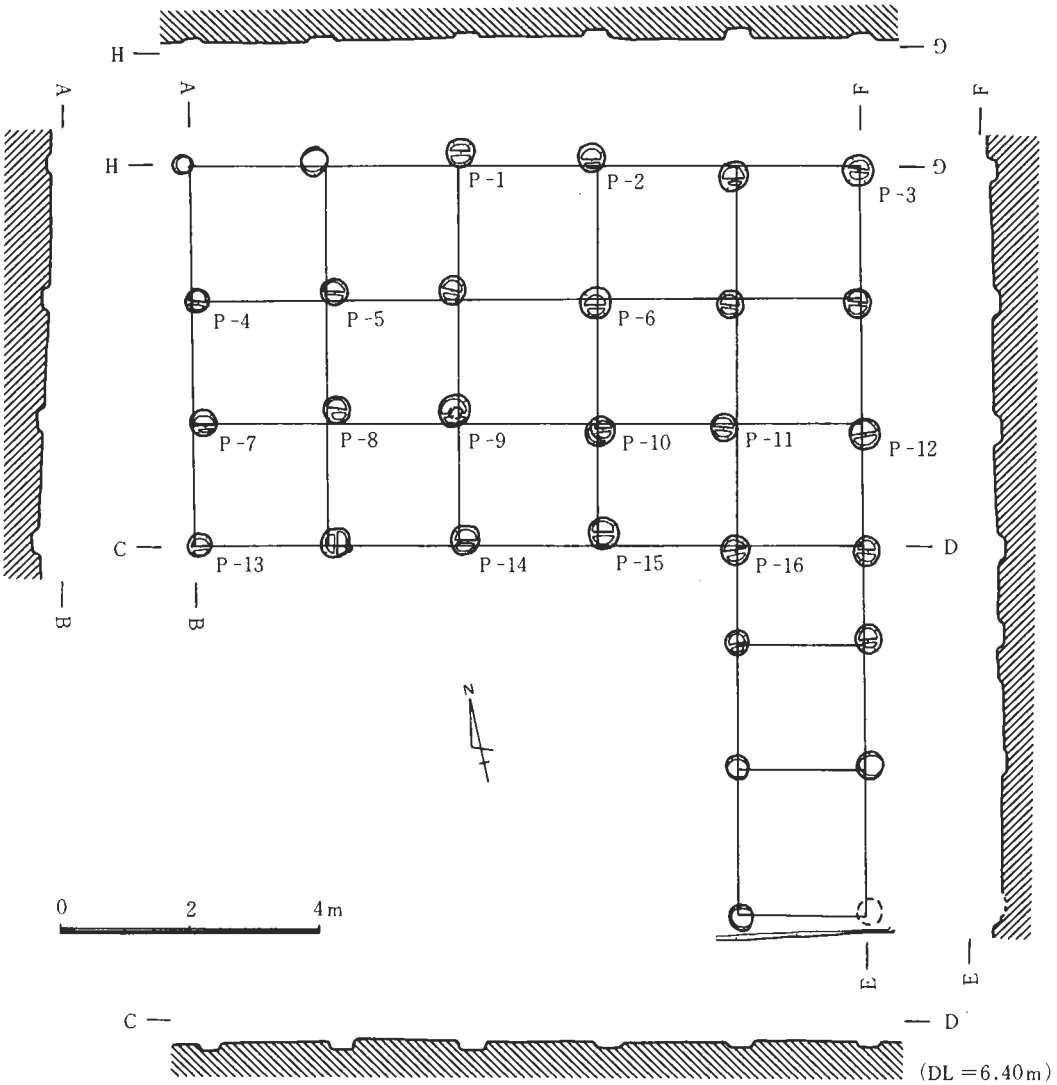


Fig. 7　SB－1

かった。棟方向はN－81°50′－Wで，調査区北辺とほぼ平行に建てられたことが推測される。柱間寸法は，桁行が1.95m（6.5尺）ないし2.10m（7尺），梁間も1.95m（6.5尺）ないし2.10m（7尺）であるが，張り出し部分は1.50m（5尺），1.95m（6.5尺），2.25m（7.5尺）とまちまちである。柱穴の掘り方は円形で径28～50cmを測るが，径42cm前後のものが多い。柱径は残存していた柱痕及び柱根から径15～22cmであったと推測される。これら柱穴の深さは検出面から5～17cmと概して浅く，底面の標高は8.803～9.155mを測るが，9.000m前後のものが最も多い。埋土は赤褐色粘質土単一層で，柱痕部分は暗褐色が強い。遺物は，掘り方が浅いこともあって極めて少なく，かつ，細片で器形を知り得るものはP－1出土の1点のみであった。

出土遺物（Fig. 14－26）

関西系の火鉢片で，瓦質である。小片で体部径を復元するには至らなかったが，体部上位の一部とみられ，外上方へ立ち上がる底部からやや屈曲し，上方へのびる。外面には亀甲状の文様と1状の沈線が施され，内面は回転ナデ調整となる。18世紀頃の所産とみられる。

(2) ＳＢ－2（Fig. 8）

ＳＢ－2は，調査区ほぼ中央部南寄り，ＳＢ－1の南隣りで検出した桁行4間（総長約7.8m，約26尺），梁間2間（総長約4.3m，約14尺）の東西棟掘立柱建物跡である。棟方向はN－86°25′－Wで，ＳＢ－1より4°35′ほど西に振っている。柱間寸法は，桁行がほぼ1.95m（6.5尺）等間隔，梁間はほぼ2.1m（7尺）等間隔となっている。柱穴の掘り方はＳＢ－1同様円形で径30～54cmを測るが，径40cm前後のものが多い。柱径は残存している柱痕から推測すると15～20cmであったとみられる。これら柱穴の深さはＳＢ－1のそれと同じく概して浅く，検出面から8～14cmで，底面の標高は8.671～8.837mを測る。埋土は全くＳＢ－1のそれと同じで

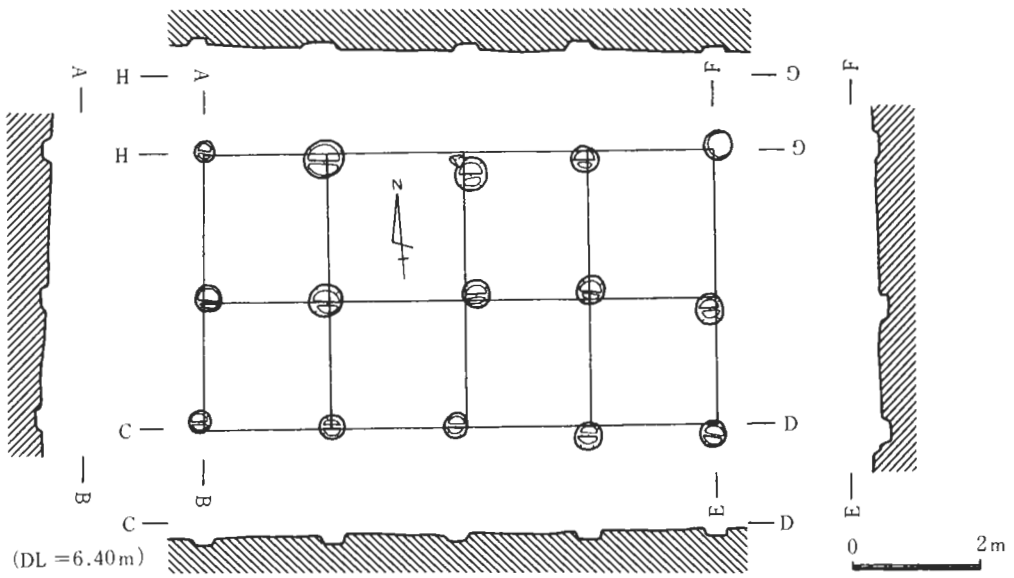


Fig. 8　SB－2

赤褐色粘質土単一層で，柱痕部分は暗褐色が強い。遺物は皆無に等しく，復元し得るものはなかったが，すべて近世陶磁器類であった。

2．土坑

(1)　SK－1　(Fig. 9)

SK－1は調査区北部で検出した便所跡ではないかとみられる土坑である。SB－1との切り合い関係は認められなかった。平面形は隅丸方形で，長辺約1.70m，短辺約1.35m，深さ0.74mを測る。長軸方向はN－74°－Eで，SB－1とはほぼ反対方向を向く。断面形は逆台形状を呈し，壁はほぼ平らな底面から急角度で立ち上がる。埋土は4層に分層され，1層礫混暗褐色粘質土，2層赤黄色粘性砂礫土，3層赤褐色粘性砂礫土，4層礫・瓦混暗褐色粘質土であり，壁には薄く赤褐色粘質土（土佐では通称「ハンダ」と呼ばれる土。）が貼付されていた。遺物の大半は4層中から出土し，その量は比較的多かったが，ほとんど平瓦の細片で図示できたのは2点のみであった。

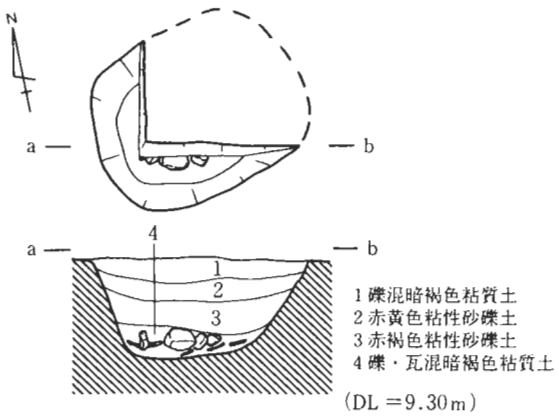


Fig. 9　SK－1　(S＝1：60)

出土遺物　(Fig. 14－27・28)

2点とも産地不明の陶器で，27は福岡系，28は備前系とみられるが，地元で焼かれた可能性もある。27は碗の底部で，高台は比較的高く，しっかりした削り出し高台となる。高台以外に鉄釉が施釉され，見込は蛇ノ目状に釉剝ぎが行われる。28は糸目徳利であるが，口縁部と中胴部以下が欠失する，口頸部はほぼ真上に上がり，肩部は小さく屈曲し，胴部はなだらかに下る。外面肩部以下に回転カキ目調整，胴部内面は回転ナデ調整。釉は口頸部内面から外面にかけて黒褐色釉を施釉する。

(2)　SK－2　(Fig. 10)

SK－2は調査区北部で検出した便所跡ではないかとみられる土坑である。SB－1，SK－1の北側に隣接する。平面形は隅丸方形状をなす比較的浅い掘り込みにやや南北が長い楕円形を呈する土坑が重なった形状をなす。隅丸方形状を呈する掘り込みは長辺0.93m，短辺0.61m，深さ0.10m，楕円形を呈する掘り込みは長径0.66m，短径0.59m，深さ0.60mを測る。長軸方向は，前者がN－87°－E，後者がN－10°－Eを呈す。断面形はほぼ逆台

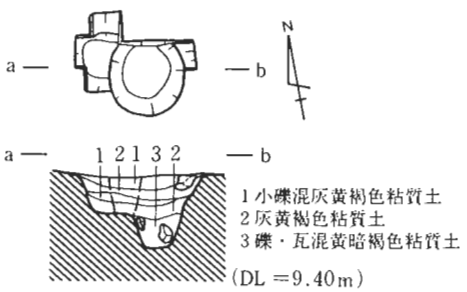


Fig. 10　SK－2　(S＝1：60)

形状を呈し，壁はほぼ平らな底面から急角度で立ち上がる。埋土は５層に分層され，上層部が小礫混灰黄褐色粘質土と灰黄褐色粘質土の互層となり，下層部が礫・瓦混黄暗褐色粘質土となっていた。また，楕円形の掘り込みの壁には，ＳＫ－１のそれと同様薄く赤褐色粘質土が貼付されていた。遺物は楕円形の掘り込み部分から出土したが，少量で図示できたのは１点のみであった。

出土遺物（Fig. 14－29）

備前の擂鉢で，底部の破片である。底部は平らで，体部は外上方へ立ち上がる。内面には７本単位の条線が全面に施されている。外面は回転ナデ調整が施される。

(3) ＳＫ－３

ＳＫ－３は調査区南東部で検出した不整形の土坑でさらに調査区外へのびる。ＳＢ－１の張り出し部の柱穴はこの底面で検出された。平面形は元来方形ではなかったかとみられるが，部分的に歪みがあり，現状では不整形を呈し，長辺6.5ｍ，短辺4.2ｍ，深さ14㎝を測る。また，ＳＢ－１の東妻柱列に平行な形で掘り残した部分がある。長軸方向はＮ－82°－Ｗ前後でほぼＳＢ－１の棟方向と一致する。断面形は上辺が非常に長い逆台形状をなし，壁は短く立ち上がる。埋土はＳＢ－１・２同様赤褐色粘質土単一層であった。出土遺物には須恵器片が１点，近世陶磁器片が数点あった程度で，図示できたのは備前の擂鉢片１点のみであった。

出土遺物（Fig. 14－30）

備前の擂鉢片で，内面には７条以上の単位の条線が全面に施される。外面は回転ナデ調整が施される。

(4) ＳＫ－４（Fig. 11）

ＳＫ－４は調査区東部で検出した方形の土坑である。長軸方向はＮ－45°－Ｗで長辺0.80ｍ，短辺0.57ｍ，深さ12㎝を測る。断面形は概ね逆台形状をなし，壁は底面より短く立ち上がる。埋土は拳大の礫を多く含む黄褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無であった。

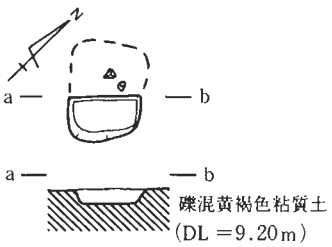


Fig. 11　SK－4（S＝1：60）

3．その他の遺構及び井戸

(1) その他の遺構

前述の遺構以外にピット４個を検出した。この内，東端で検出したピット３個は，ＳＢ－１の東妻柱列に平行しているが，建物や塀を復元するには至らなかった。それらピットの平面形はほぼ円形で径0.56～0.67ｍ，深さは15㎝前後であった。もう一つのピットは，ＳＢ－１の西側，約1.95ｍ（6.5尺）の位置で検出した。平面形はほぼ円形で径0.56ｍ，深さ17.5㎝を測る。これら４個のピットの埋土は，ＳＢ－１・２同様赤褐色粘質土単一層であった。

なお，遺構検出面で礎石として使用された可能性のある石を数個検出したが，建物を復元するには至らなかった。

(2) 井戸 (Fig. 12)

当該邸跡の一隅には当時のものと伝えられる井戸が残っている。今回の史跡整備では現状で保存する計画であったため，調査対象から除外したが，測量することができたのでその概略を記す。

当初，上面に石組がみられたため，石組井戸ではないかと考えられたが，石組は上面の一面のみで，素掘りとなっていた。掘り方は円形で，径約0.70m，深さ3.45m以上とみられ，上端面から約1.5m以下には水が溜り，底面にはヘドロが堆積している。また，壁の一部には表面が薄く剝落した部分があり，その部分にはSK－1・2で認められた赤褐色粘質土が貼付されており，壁全面に薄く貼付されているものとみられる。

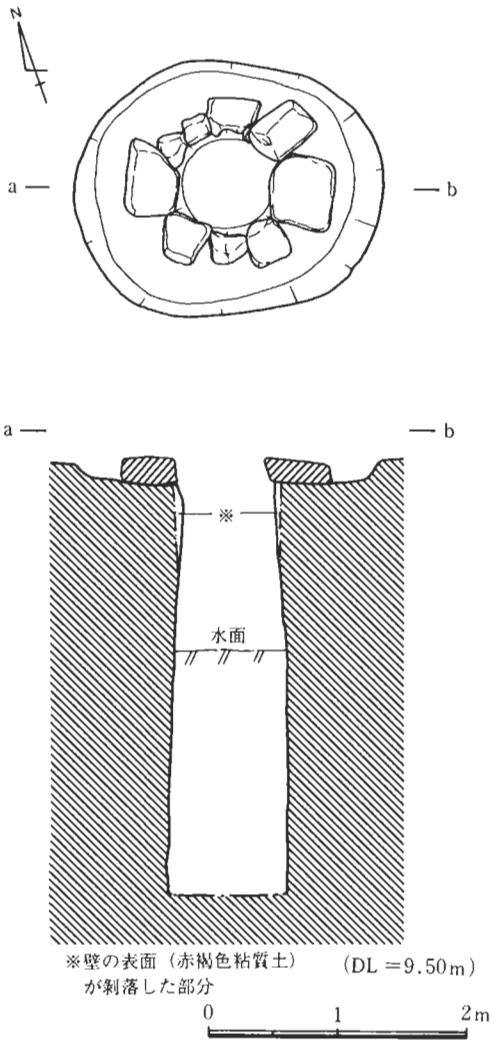


Fig. 12 井戸

第Ⅴ章　考　　察

今回確認された遺構が，鹿持雅澄邸とどのような関連があるのか調査結果をもとに考察してみたい。なお，鹿持雅澄邸については，『日本文学研究』第三号－鹿持雅澄特集－昭和33年９月の中に橋詰延寿の「鹿持雅澄旧邸の聞き書」という文書があり，その中に掲載されている聞書図（Fig. 15）にある井戸と現存する井戸とがほぼ同一場所にあることからそこに記載された建物も当時のものであると思われていた。ただし，そこに記載された旧邸の様子とは1888年頃の様子で，鹿持雅澄（1791～1858）の死後30年も経った頃のことである。

まず，２基の土坑，ＳＫ－１・２についてみてみたい。この２基の土坑は，規模に違いがみられるが，掘り方，堆積状況及び壁に赤褐色粘質土を薄く貼付している点で共通している。その性格は壁に赤褐色粘質土を薄く貼付していることなどから前述のとおり便所であったと考えられ，田村遺跡群の中の近世の遺構，中でも18世紀以降のものなどに類例を多くみることができる。埋った時期は，出土遺物が少なく明確ではないが，少なくても19世紀以降であるといえよう。また，この２基は先の聞書図の中に記載されている便所とその位置がほぼ一致している。これらのことを総合すると旧邸（1888年頃）のものであった可能性が極めて高いと言えるようである。

一方，２棟の掘立柱建物，ＳＢ－１・２はどうであろうか。この２棟はその位置関係と規模などからみてＳＢ－１が母屋で，やや棟方向を異にするＳＢ－２が母屋と軒を接する離れと考えることができる。ＳＢ－１は比較的柱間寸法が一定しており，東側の桁行３間，梁間３間部分は柱間寸法が約２ｍ（６尺５寸）に割り付けられていることから畳敷きの部屋（座敷），西側の南桁行２間，梁間１間部分が板床，西側の北桁行２間，梁間２間が土間に復元することも可能である。土間内の土坑（ＳＫ－１）は貯蔵穴，風呂，便所などが考えられるが，如上の便所であったとみられる。また，張出し部分は，屋根が母屋と接続する角屋または別棟の土蔵などが考えられる。ＳＢ－２は，柱間寸法や柱の並びがやや不揃いであることから土間床の納屋や物置などが想定されよう。なお，この２棟の時期は出土遺物からみる限り少なくとも18世紀以降に建てられたものと推察される。

以上，遺構本体からその性格，時期についてみてきたが，次にこれらの基盤となった土層についてみてみよう。これら遺構はすべて第Ⅱ層上面で検出されている。換言すれば整地層の上から掘り込まれたものである。この整地層からは当地の能茶山焼の陶磁器が出土している。能茶山焼は高知市鴨部の能茶山に肥前の陶工を雇入れ1820年に開窯された土佐藩営窯で明治維新で閉窯している。窯本体の調査が実施されていないため詳細は不明であるが，概ね19世紀前半以降のものとみて大過なかろう。また，伴出した肥前系の磁器も当該編年のⅤ期に位置付けられるもので，時期的には19世紀前半と考えられている。他の伴出遺物もほぼ同時期かそれ以前

のものとみられる。これらを総合するとこの整地層は19世紀前半，中でも1820年以降の所産とみて間違いなかろう。このことから今回検出された遺構もすべて19世紀前半以降，中でも1820年以降のものと思料される。

ここで，先の「鹿持雅澄旧邸の聞き書」（以下「聞き書」という。）と間書図に記載された建物などとの関連をみてみたい。「聞き書」の中に記載された建物は礎石建ちで南北３間，東西６間の東西棟建物であったと推察される。今回検出したＳ－１などの石がその礎石であった可能性もあるが，建物を復元するには至らなかった。その理由としては，この鹿持邸が後に畑地となったことから耕作に支障となる礎石などの石は取り除かれたためとみることもできよう。ともかく，地表下に掘り込まれたもののみが壊されずに残り今回確認できたのである。この内，便所跡とみられる２基の土坑は時期的，位置的にみて前述のとおり聞き書に記載された便所とみてほぼ間違いなかろう。一方，ＳＢ－１・２の掘立柱建物跡は，「聞き書」に記載されておらず，1888年当時には存在しなかったとみられる。「聞き書」以降新たな建物が建っていないことからこの２棟は1888年当時の建物に先行するものと考えることができよう。そして，19世紀前半以降のものであることと考え合わすと丁度，鹿持雅澄が生存した時期と重なる。この２棟の建物に誰が住んでいたか考古学的に言明できないまでも，この地が鹿持雅澄邸であるならば，この２棟は正に鹿持雅澄邸であったと言わざるを得ないのではなかろうか。ＳＫ－１・２との関連については不明確ではあるが，位置関係，出土遺物及び他にそれに相当するものが存在しないことなどからみると共存した可能性も考えられる。もし共存したとすれば，便所と井戸は２時期に渡って使用されたことになる。

叙上，今回確認された遺構と鹿持雅澄邸との関係について考えてきたが，この時期の建物については調査例もほとんどなく現存している建物から推測されているのが現状であり，不明確な点も多い。また，現存する近世民家のほとんどは礎石建てか土台建てであり，このような掘立柱建物は少ないのであるが，文献等ではむしろ掘立柱建物の方が数の上では圧倒的に多かったようである。ただし，中農以下の貧しい農家に多かったとのことである。[1] 鹿持雅澄の身分と家計をみた場合，土佐藩の下級武士（白札）で，家計は困窮していたらしく，家は古く，雨漏りがし，机を持って部屋をあちこち移動しなければならなかったとのことである。さらに，妻が死んでも葬式を出す費用がないほどであったらしい。[2] このような状況から推察すると，下級武士とはいえ，住まいが掘立柱建てであったとしてもあながち不釣り合いとは言えないのではなかろうか。ともかく，当時の建物跡の発掘例が少ない現状としては，建物の構造から云々するのは無理がありそうである。明確なことは，掘立柱建物という古代以降一般的な住居形態がこの時期まで残存していたことであり，今後近世民家を研究する上での一つの資料となり得ることであろう。

註

(1) 宮本長二郎氏の御教示による。また，掘立柱建物の間取りについても宮本氏の御教示に負う所が多い。

(2) 高知新聞の鹿持雅澄特集「雅澄と万葉　－生誕200年を前に－」 13 鹿持家の家計　安岡正隆　1991年２月27日

参考文献

大橋康二　『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社　1989年

稲葉和也・中山繁信　『日本人のすまい』　彰国社　1990年

前　久夫　『古建築の基礎知識』　光村推古書院　1986年

『やきもの事典』　平凡社　1989年

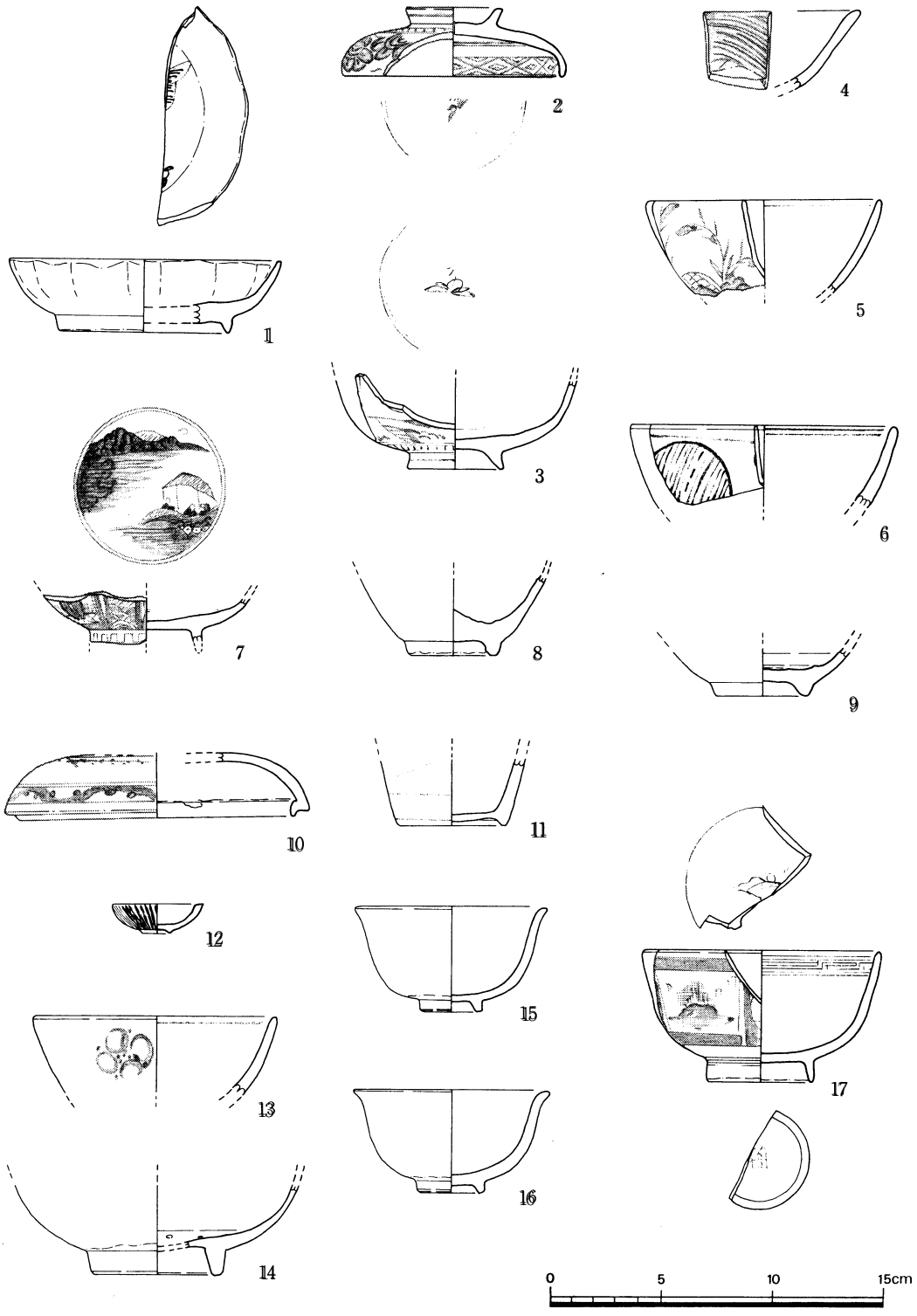


Fig.13　遺物実測図1

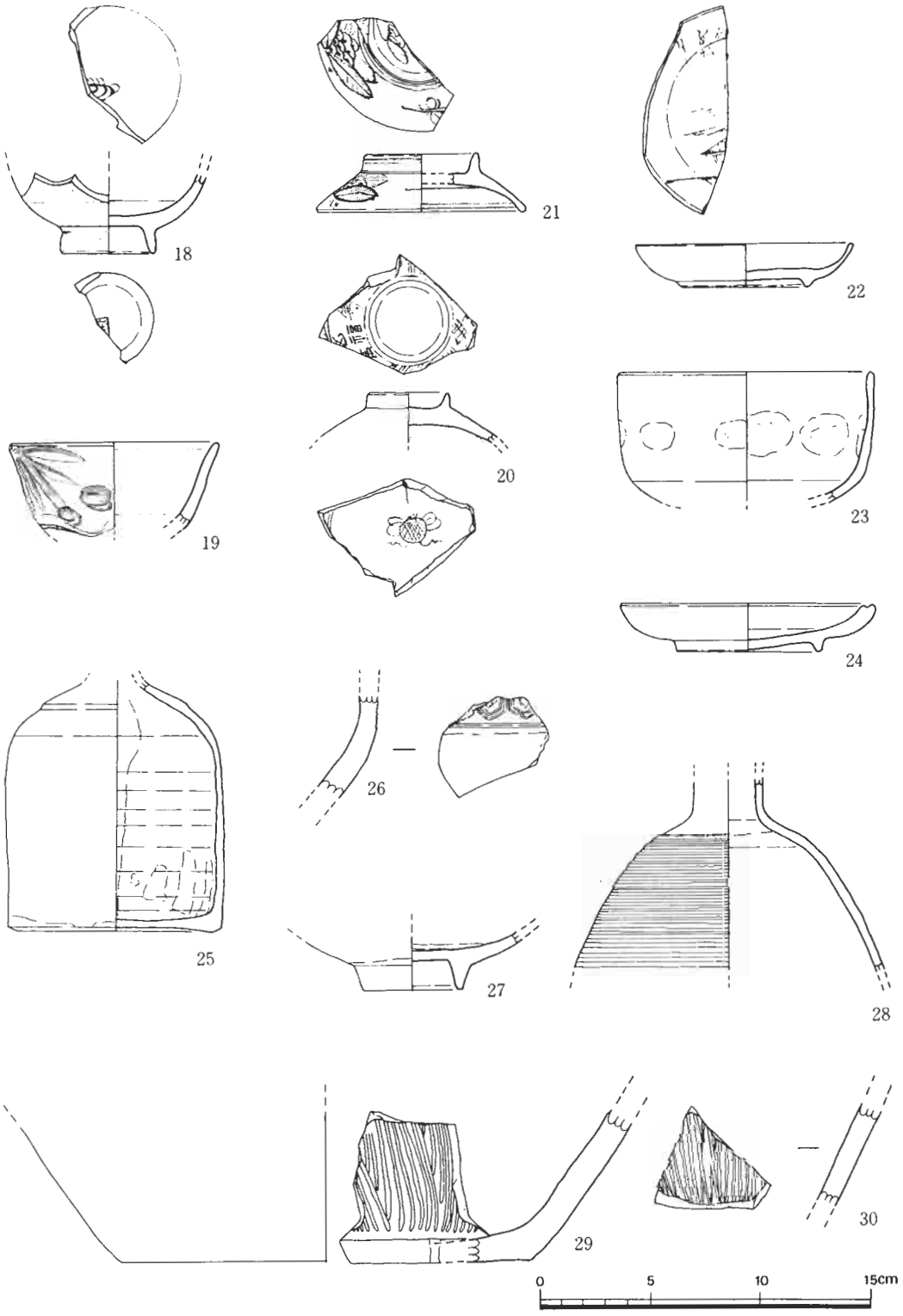
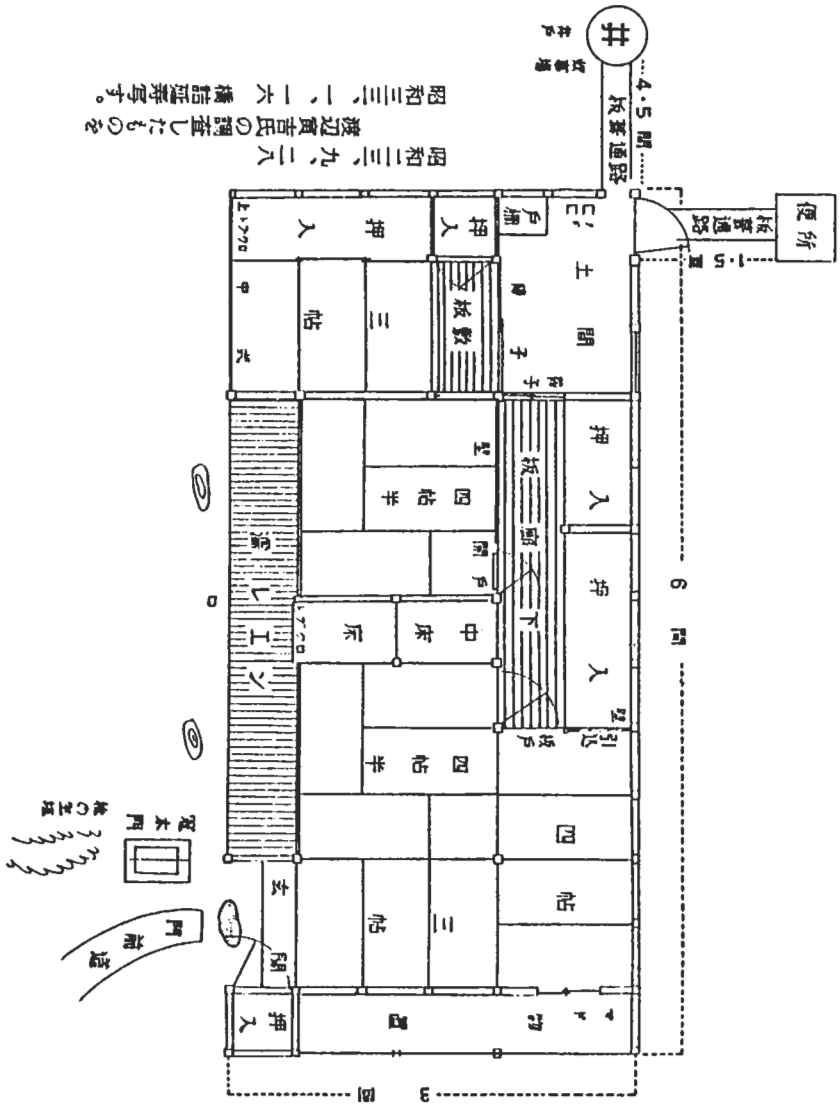


Fig. 14　遺物実測図 2



鹿持雅澄先生旧邸閑書図

『日本文学研究』第三号 ―鹿持雅澄特集―
昭和33年9月

Fig. 15　鹿持雅澄先生旧邸閑書図

江）矢野氏から来ておりましたが、雅吉さん出生後、産後のひだち悪しくて死去し、後妻に小高坂村（いま高知市小高坂）岩井家の方が来て、この方が、鹿、多満衛（たまえ）の二女子を産みました。

多満衛さんは、私の姉りんと同年で、私は三つ年下でしたが、それでも田舎では友達もないところから、私達幼な友達として、何時もよく遊んでもらったものです。

多満衛さん十二、三才の頃、お父さんである雅慶さんは、一家をあげて小高坂村政所（井口橋を東に渡り、今一つ小橋を北に渡って六十メートル位）に引っ越されました。後には奥さんの養兄（奥さん里方岩井家、姉の主人になる方）になる矢野川某さんが来て住んでおりましたが、おること五年位で矢野川さんは幡多郡神の島（いま宿毛市神の島）村の戸長に赴任するようになり、その時家を万万（ま ま）村（いま高知市万万）出口の通称助さんという人に売り渡して、コワシ家としましたが、家はその後、何処へどうなったか知りません。

一二、当時先生宅に何時も勉強に見えられたのは、次の方々でした。

矢野川、島田、国沢、岡部、大江、井野辺さん等々。

寅さんは小柄で、品のある人であった。そうしてまことに確な記憶で、順序よくすらすらと話してくれたと渡辺氏は述懐している。

なお飛鳥井（鹿持）雅慶の旧邸は福井村一二五番屋敷であるので、一二八番屋敷の話者森本寅さんとの間には、外に二軒の屋敷があったことが考えられる。

聞き書

一、旧お屋敷への通路は、福井町本道の鹿持橋の処から細い道を通って畑地屋敷の処を、巽に登って御門に入るようになって居りました。

二、ご門は坊主門で、家の南方に建っておりました。

三、お屋敷の広さは、東西九間、南北十間で面積は九十坪位有ったでしょう。

註、なお現在の畑地の面積は四畝十五歩であるが、実測すると今少し広いかも知れない。現在土地所有者は雅澄先生二男の後裔の大倉三四茂氏である。

四、お家は間口六間、奥行三間、建坪二十坪位で間数は五、六間ありました。

五、家は、東方を壁でふさぎ、南面して開け、建っていました。屋内の間取りは、あらかた別図の通りであります。

六、お家は瓦葺、藁葺半々屋根の平屋建で本宅一棟だけでした。なおくわしく申しすと、屋根の右半分が瓦葺で、左半分が藁葺でしたが、藁葺の方も庇だけは、全部瓦葺でした。なお小さな便所が、家の北隅に離れて建っておりました。

七、井戸は、家の西北隅四、五間の処に在って、皆様そこでお炊事やらお洗濯やらなされておりました。

八、お庭は表座敷の前にあって、狭い平庭でしたが、真ん中に二、三庭石がすわり、その周囲には、ツワ、ハラン、サツキ、ツツジ、ボケなどが植っておりました。

九、庭樹の大きな物としては、次のようなものがありました。

1、松の木　庭の中央にあって令孫雅吉さんの誕生記念に雅澄先生が植えられたといいます。大きな木でした。

2、モッコクの木　これも大きな木で、その落葉がいつも手洗に一ぱい落ちて居りました。

3、ボケの木　紅白咲き分けのもので花はきれいに大きな木でした。

4、柿の木　が二木、大きな渋柿の木でした。

一〇、お家の東側には梅畑があってたくさんの梅の木が植わっており、毎年七月盛夏の候には井口屋の喜太さんという人が雇われて来て、その手入れをしておりました。

註、井口は現在高知市井口町で、雅澄邸から七、八町もある。喜屋や喜太さんのことははっきりわからない。

一一、先生の長男雅慶さんの奥さんは、もと潮江村（いま高知市潮

付録「鹿持雅澄旧邸の聞き書」　橋詰延寿

鹿持雅澄旧邸の聞き書

橋詰延寿

はじめに

この鹿持雅澄の旧邸の聞き書は、私の尊敬する先覚渡辺寅吉氏―高知市福井町八三九番―が昭和二十三年九二十八日、旧姓森木寅さんから聴取したものである。

私は、渡辺氏の快諾を得、雅澄先先の百年祭を好機に、私の若い友人達が経営編集している日本文学研究にこの稿をおくるわけである。

森本寅さん

この話の主である森木寅さんは、鹿持雅澄邸のすぐ西方で、当時福井村一二八番屋敷農業森木楠兵衛の二女である。明治六年（一八七三）二月十九日生れで、寅さんは十七歳の時、福井村長谷八二番屋敷（一、三〇番地内）農業高橋楠吉の二男小楠を養子に迎えた。そうして一子正喜を生んだ。が、その後、わけがあって養子と離別した。そうして母子共、両親に伴われて大阪市へ出た。大阪でいろいろ苦労したが、鍛工業をはじめた。正喜が成長したので郷里の土佐の窪村（今は高知市窪）宇都野の富田愛次の娘政恵と結婚。長女静子を生んだ。その後正喜が死亡したので、静子が成年になると、土佐郡旭村福井（今は高知市福井町）農業徳弘作馬の二男信男を養子に迎えた。二男一女をあげ、いま祖母静子と親子五人計六人暮しで、現在大阪府の高槻市真上九八〇番地に居住している。数人の徒弟とともに鍛工業を営んでいる。それで現在の世帯主夫婦は、森木寅さんの孫にあたるものである。

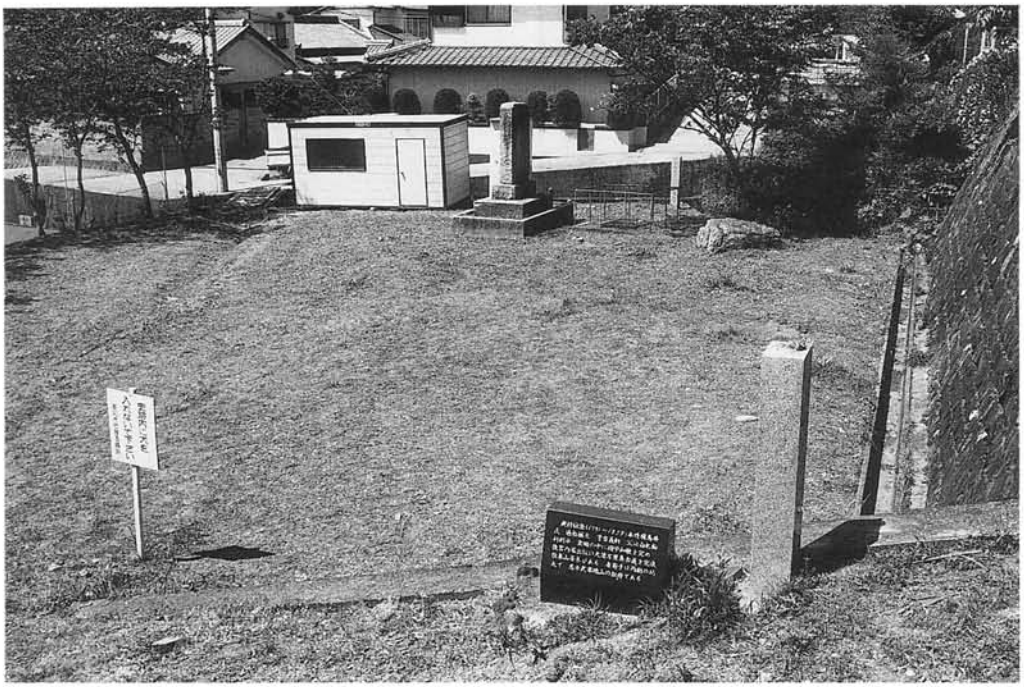
この寅さんは昭和三十一年六月某日、行年八十三歳で死亡している。

渡辺寅吉氏が、雅澄邸の聞きとりをしたのは、前記の通り昭和二十三年九月二十八日で、寅さんの土佐への最後の帰国の時である。これは寅さんの姉りん―高知市内福井徳弘亀吉母―の病気危篤の報で見舞に帰って来た時のことである。

森木寅さんは、この時七十六才であったが、少女の時から記憶力のよい頭のよい人であった。このおばあさんは、後に記してあるように、多満衛（雅澄の直系の孫）の遊び友達であった。それで十四五の少女時代、娘時代を雅澄の旧邸でよく遊んだものである。それで旧邸のことをよく知っている。鹿持の旧邸を知るただ一人の生存者であった。

図　　版

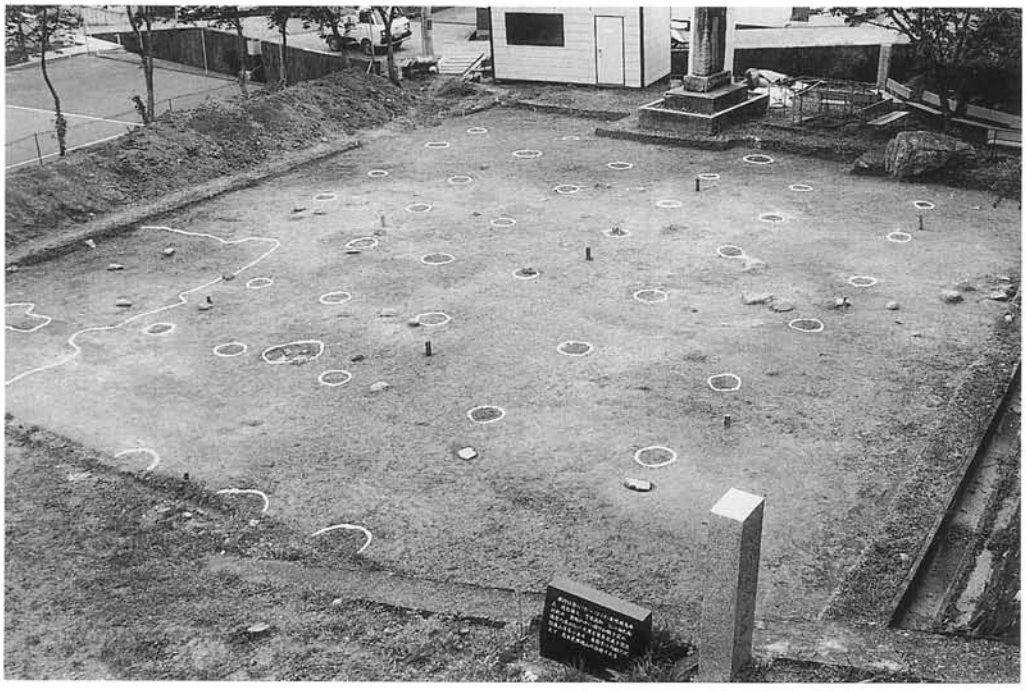
調査前全景(南より)



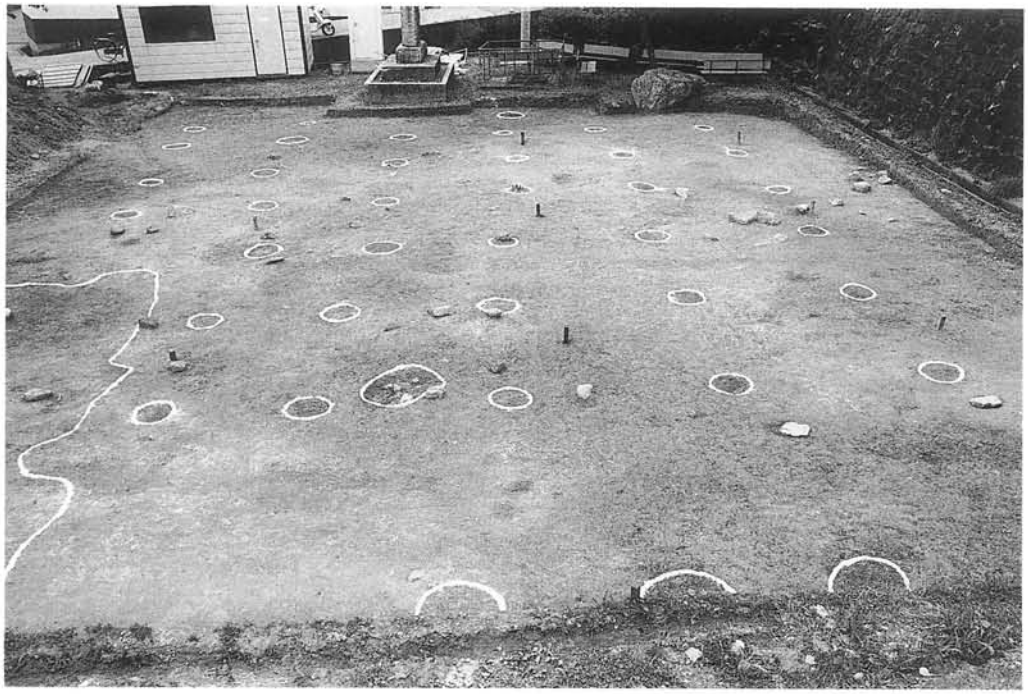
調査前全景(東より)

PL. 2

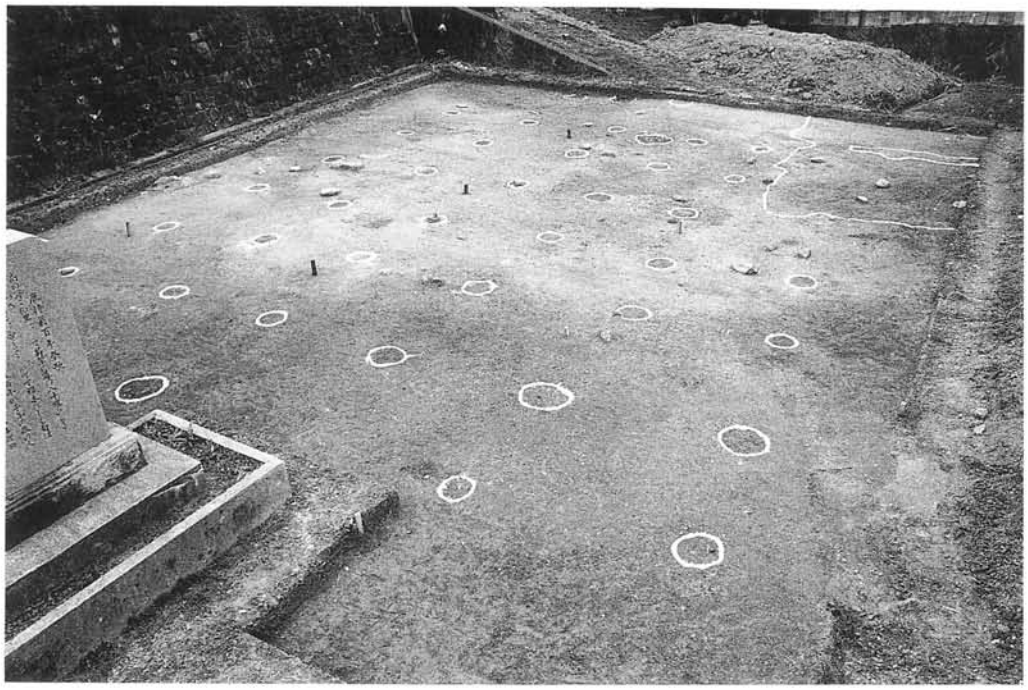
遺構検出状態(東より)



遺構検出状態(東より)

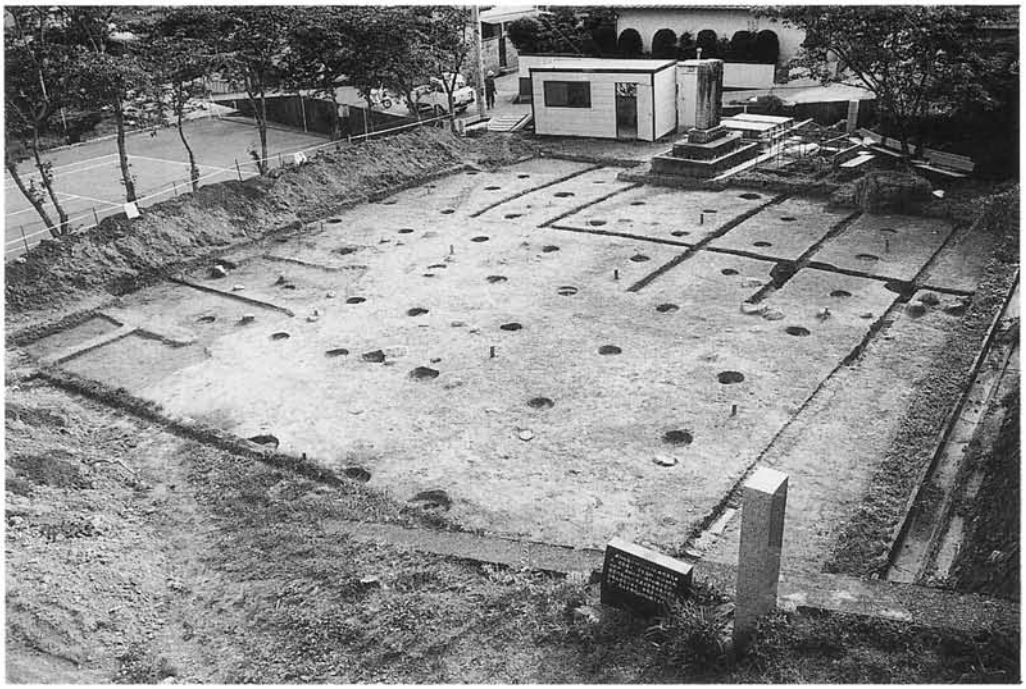


遺構検出状態（東より）



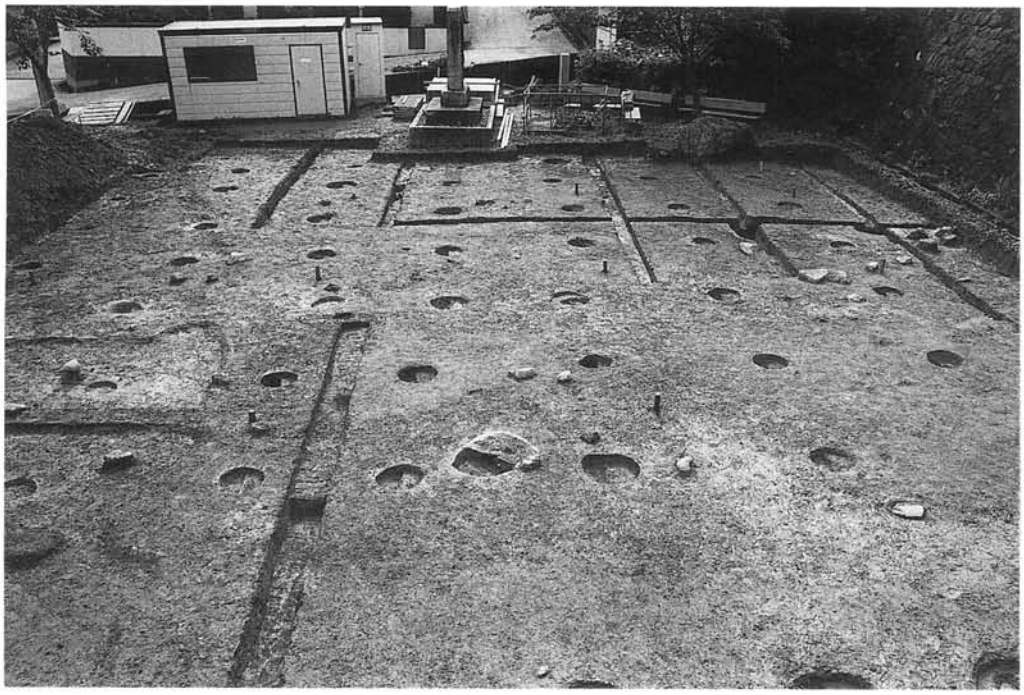
遺構検出状態（西より）

PL. 4



遺構完掘状態（東より）

遺構完掘状態（西より）



SB－1・2，SK－3（東より）

SB－1・2，SK－3（東より）

PL. 6

第Ⅰ層セクション(東より)

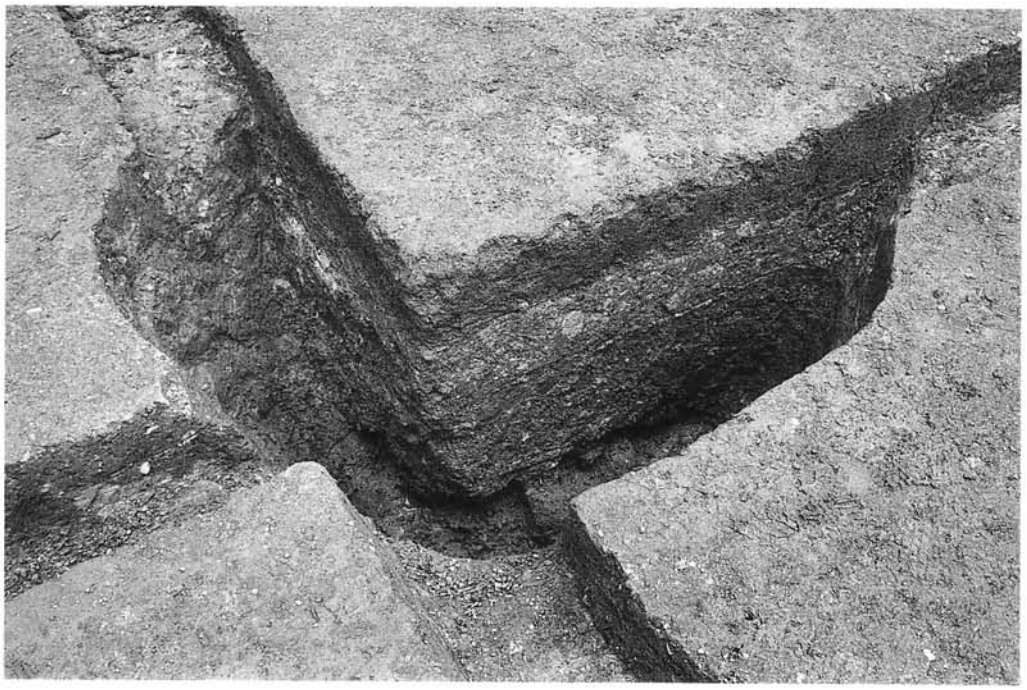
サブトレンチセクション(南より)

SB－1　P－9　検出状態(南より)

SB－1　P－9　完掘状態(南より)

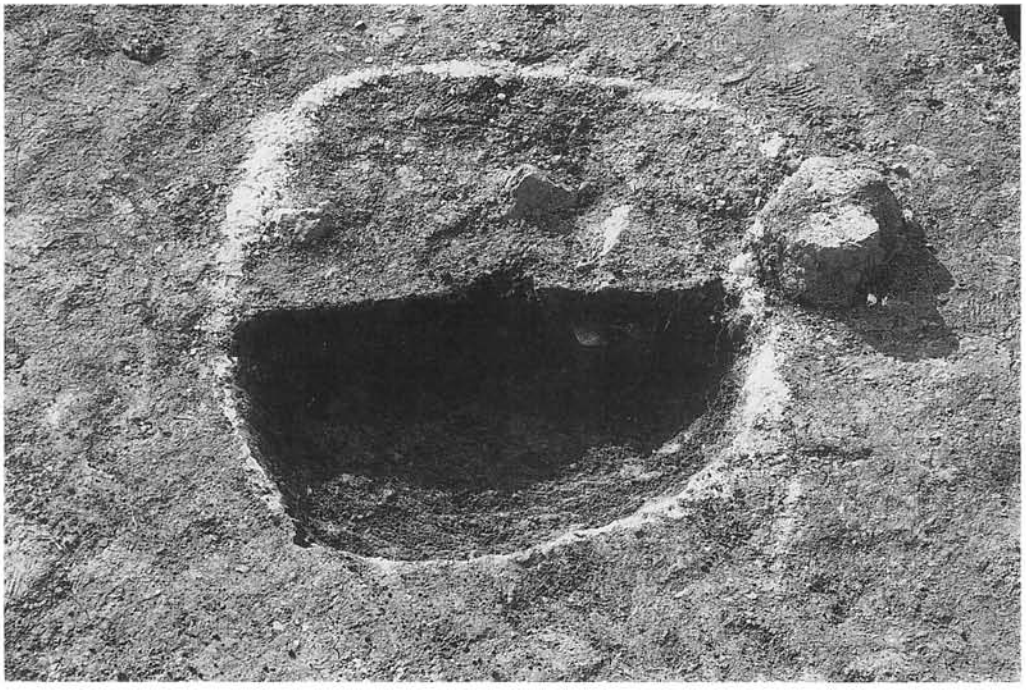
PL. 8

SK－1（南より）



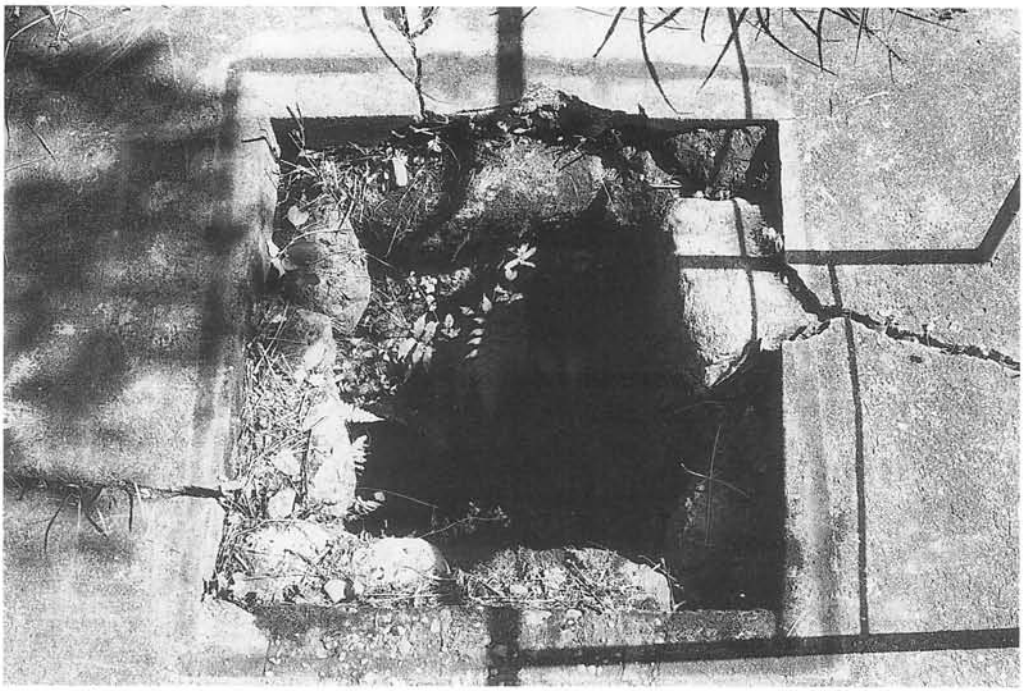
SK－1（南より）

SK－2（南より）

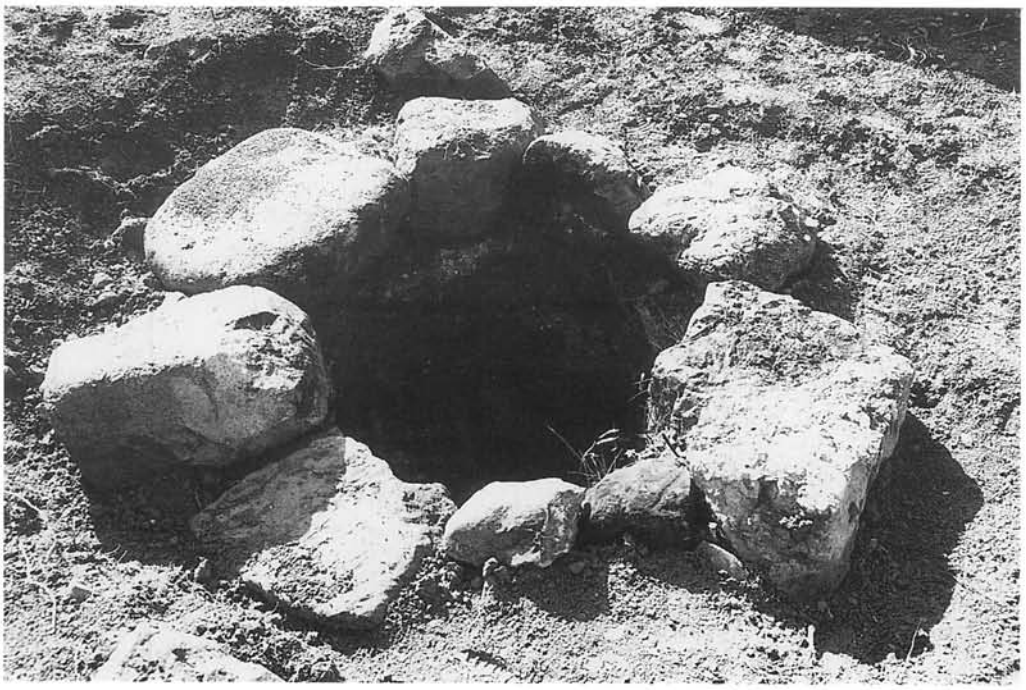


SK－4（東より）

PL. 10



井戸（南より）



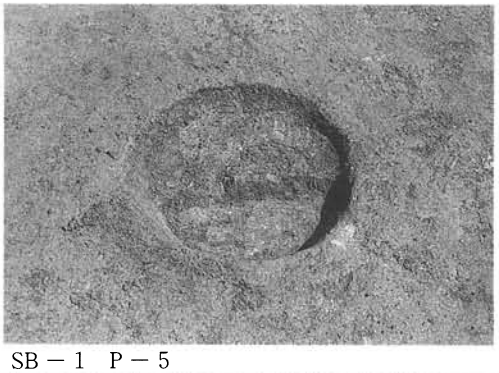
井戸（北より）

SB－1　P－1

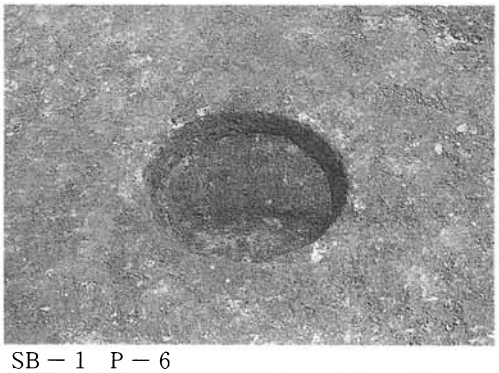
SB－1　P－2

SB－1　P－3

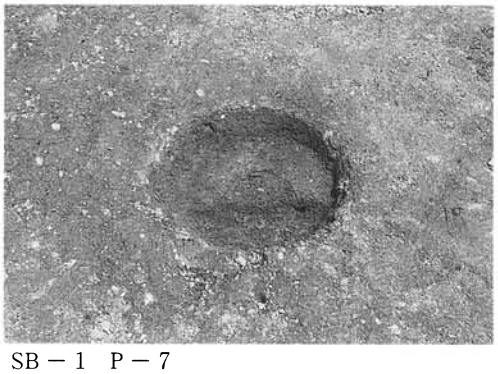
SB－1　P－4



SB－1　P－5



SB－1　P－6



SB－1　P－7

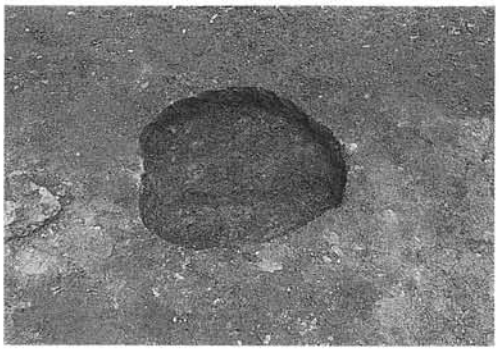
SB－1　P－8

PL. 12

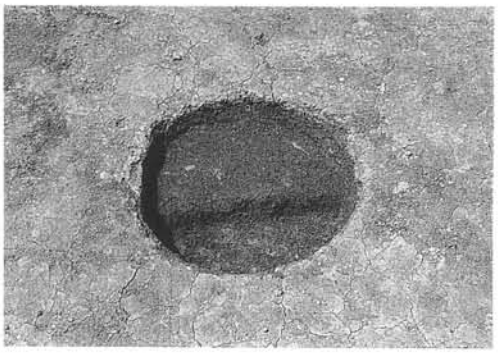
SB－1　P－9（柱の材質は松）

SB－1　P－10

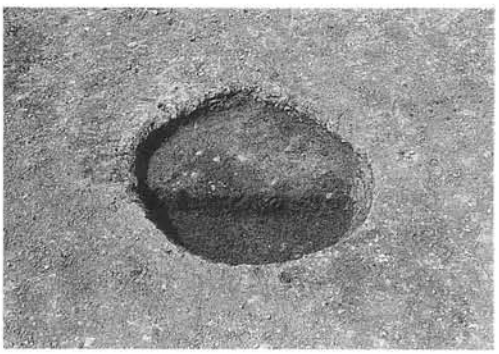
SB－1　P－11



SB－1　P－12



SB－1　P－13

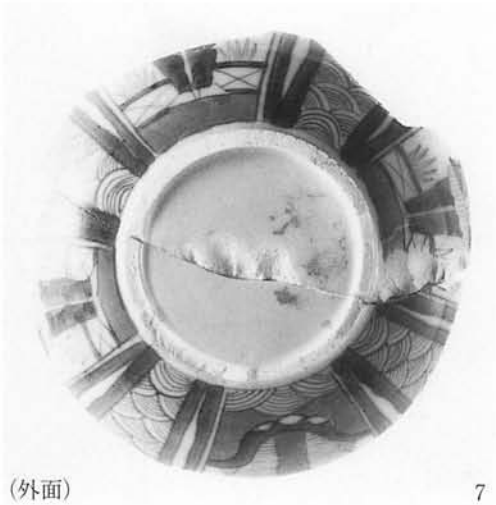


SB－1　P－14

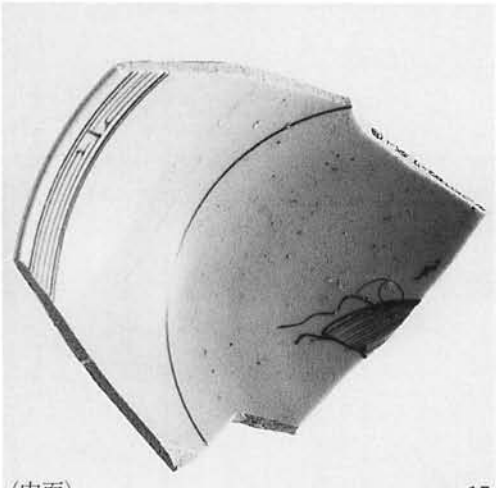
SB－1　P－15

SB－1　P－16

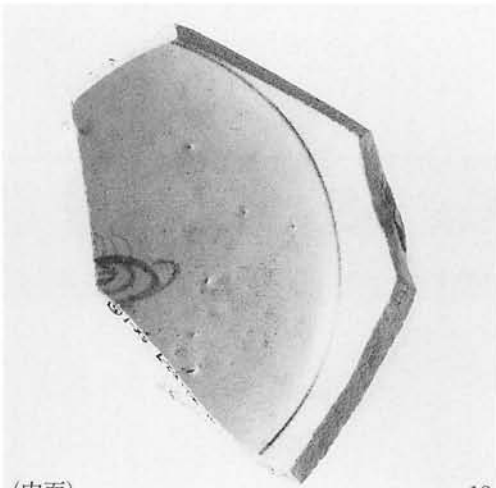
(内面) 7



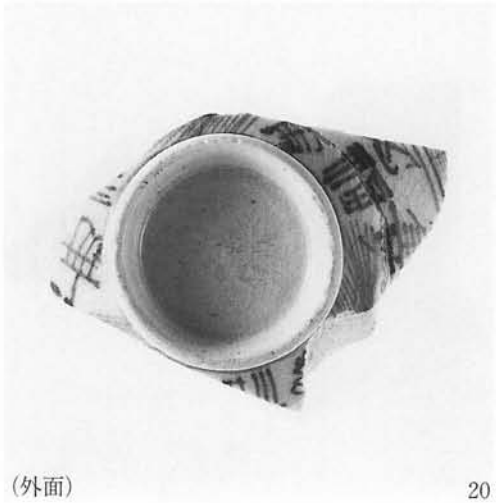
(外面) 7



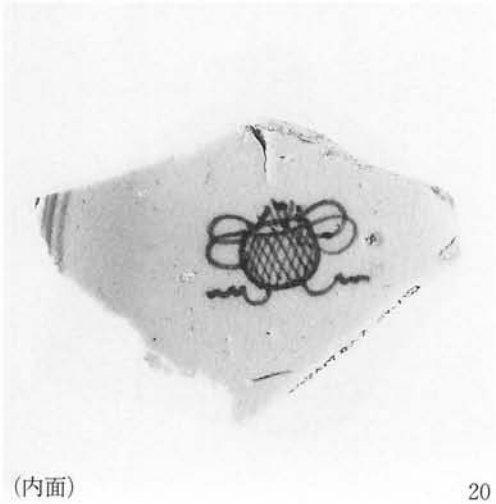
(内面) 17



(内面) 18



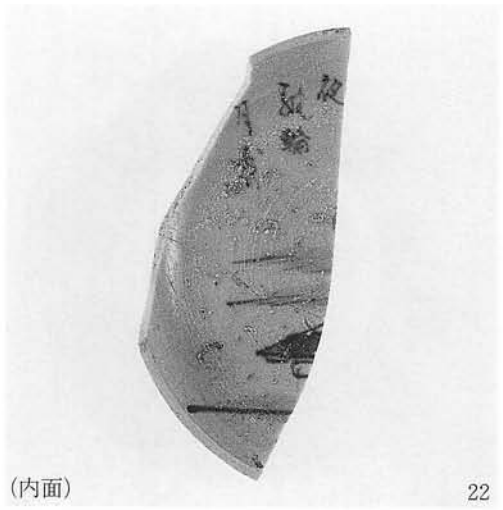
(外面) 20



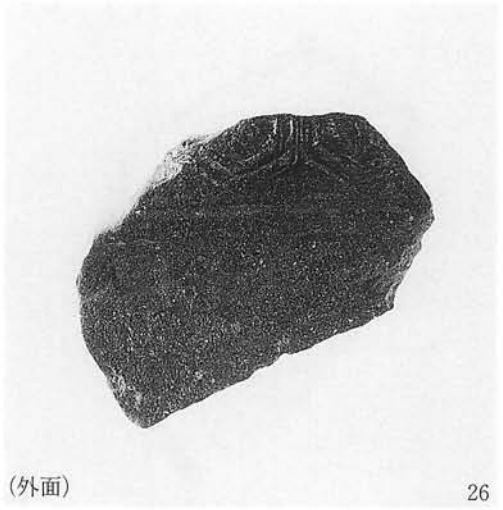
(内面) 20

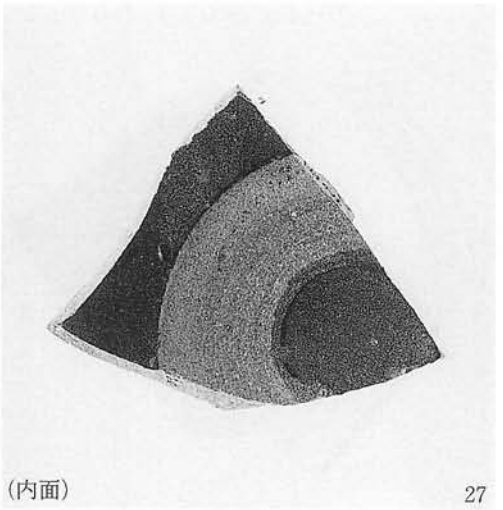
出土遺物 1

PL. 14

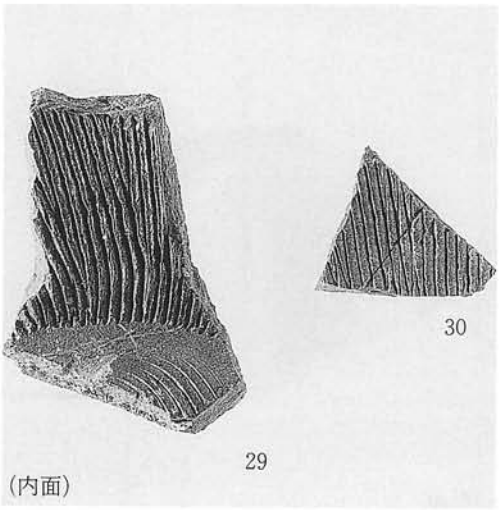

(内面) 22

25


(外面) 26


(内面) 27

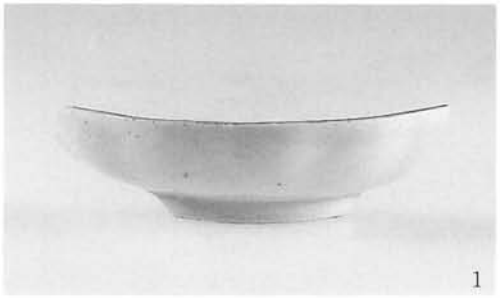
28

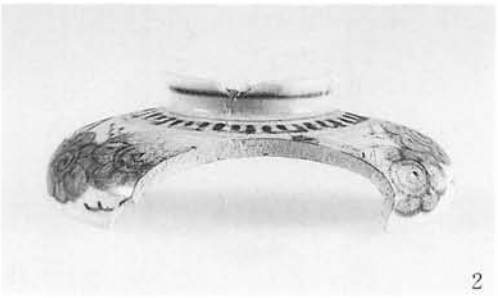

29

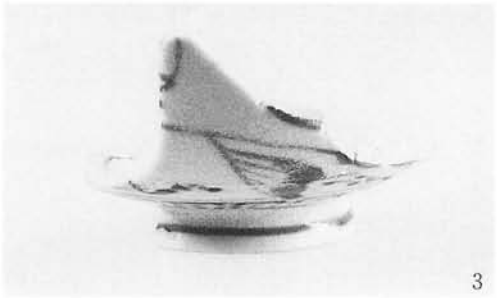
30

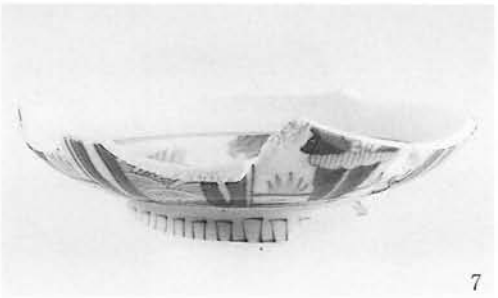
(内面)

出土遺物 2


1

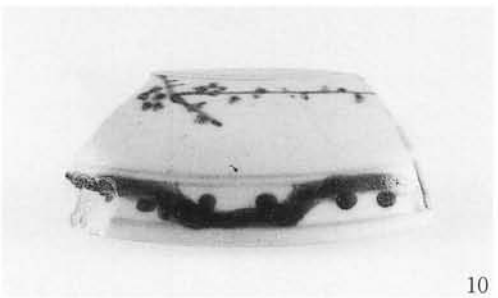

2

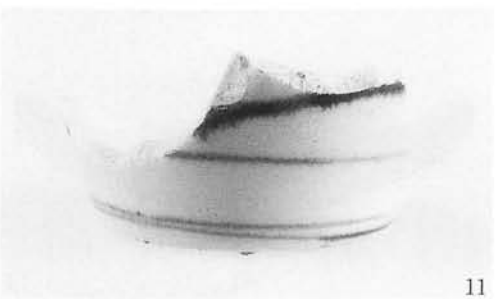

3


7

8

9


10

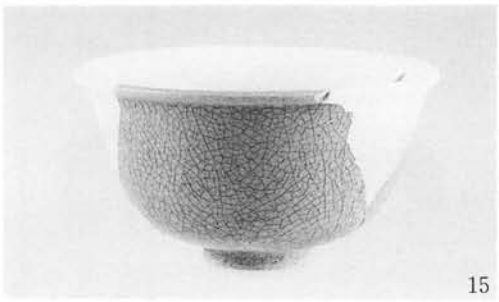

11

12

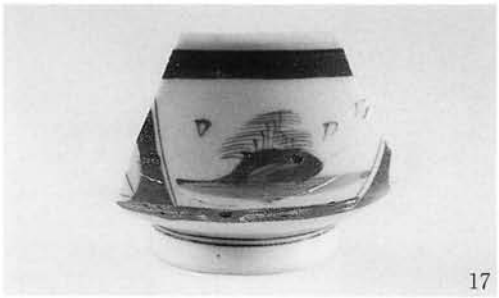
14

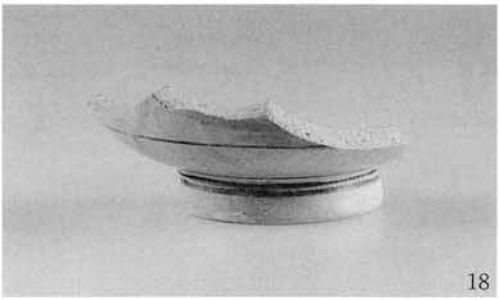
出土遺物 3

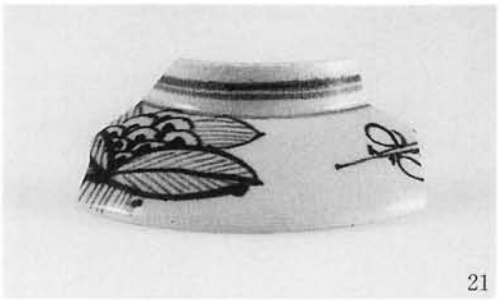
PL. 16

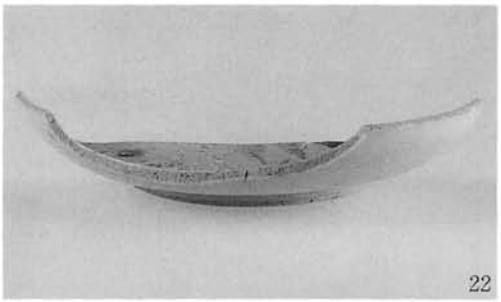

15

16


17

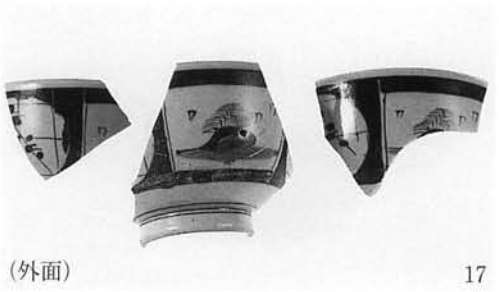

18

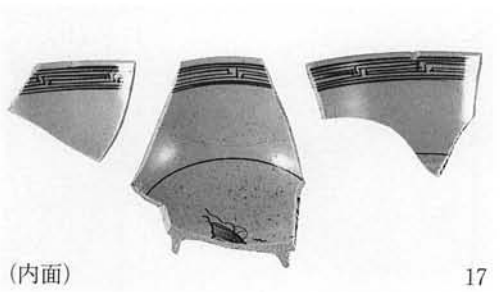

21


22

24

27


(外面) 17


(内面) 17

出土遺物 4

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２集

県史跡　**鹿持雅澄邸跡**

県史跡鹿持雅澄邸跡整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

１９９２・３

発　行　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437－1
TEL　0888－64－0671

印　刷　西 村 謄 写 堂

ＰＤＦ作成：共和印刷株式会社